ブリブリ★エモーショナル全開ファンジン
2021 June 6月号
KIRARA
うんこタイム
きららNovels
ノベルス
口絵カラー①
げりぴーまぞく
がっかり微調整!?
激しいぽんぺが止まらない!!
もうガマンできないっ!
口絵カラー②
なりたて姉妹×食中毒
遠慮しないで。
腹下しソロキャンガール
はじめてのソロキャンと
おなかいたい
真夜中のデュエット・
自称お姉ちゃん×お便秘看板娘 ラテ

まちカドまぞく
イラスト：みなみず

スローループ
イラスト：紫桃ふぃず

うんこタイムきらら Novels
サンプル版　目次

真夜中のデュエット・ラテ　……005
　ご注文はうさぎですか？　ココア×チノ

はじめてのソロキャンとおなかいたい　……021
　ゆるキャン△　志摩リン

がっかり微調整！？ 激しいぽんぺが止まらない！！　……029
　まちカドまぞく　シャミ子
　口絵１／みなみず

遠慮しないで。　……037
　スロープ　小春×ひより
　口絵２／紫桃ふぃず

奥付　……045

著：もちづきうずめ
表紙イラスト：　あしぶ
（香風チノ、志摩リン）

真夜中のデュエット・ラテ

ご注文はうさぎですか？　ココア×チノ

今日もチノはトイレの前に立っていた。

正しく描写するならばトイレのドアの前で、俯いてそわそわしながら立ち竦んでいた。

ドアノブの窓は青色。つい三〇秒前のノックに返事はなかった。物音もなく、無人の一室。だけどチノはトイレに入らない。

（早くお手洗いを済ませないと、でも……）

耳をそばだてる。

朝の音。朝日を吸って透き通った、澄んだ匂いの音がする。

チノは家屋の片隅にあるトイレの前にいた。ダイニングの水音、玄関のドアが開閉する音。リビングの話し声――朝を彷彿とさせる生活音からは遠ざかっていた。今は耳心地のいい無音と、外から冬風のざわめきが微かに聞こえるだけ。

精巧なミニチュアを思わせる煉瓦造りの街並みの一角……昼は喫茶店、夜はバーを営む店舗の裏にチノたちの住まう家屋はあった。

店舗と住居が隣り合わせ以外は変わり映えのない建物の、廊下の突き当たりを曲がった先にあるトイレの前で、チノは迷う。

困り顔で、そっとお腹に触れる。なだらかに膨れた下腹部を、緊張した右手で撫でた。性徴し、ようやくくびれ始めた腰を単調に往復していた手つきは、いつの間にか輪を描いていた。皮膚と脂肪の下にある消化器を思い描き、ぐるぐる、ぐるぐる。

（うんちがしたいです。だけど）

所作も表情も、お通じが来なくて便通を促す様にしか見えない。が、小さな手の下では大腸がぐるると唸り、お尻の穴はむずむずと疼いている。矮躯に確かな便意を感じていた。

排便をするに易く、心地よくて程よい大きさの排便欲。目覚めて身体を横から縦に起こし、空っぽのお腹に朝食を送り込み、胃腸があくびをして生まれた便意は充分に大きかった。

少女の身体もヒトとして例外なく摂取する／消化する／排泄する。昨日も朝昼晩の三食と店番の間に間食をして、今朝もしっかり朝食を摂った。活動中と睡眠中に消化活動は滞りなく行われ、大便が生産された。そうしてチノは便意を感じ、排便のためにトイレに来た。家に一ヶ所だけの個室は誰も利用していない。なのにトイレに入らない。

（いっそ我慢できなくなればいいのに……）

力んだ手のひらが熱を帯びた腹部を、今もなぞっている。もっと便意が大きくなれば、と円を重ね続ける。

排便を我慢ができなくなれば、トイレを使う勇気を必要としないと思ったから。トイレに入れない理由を、半端に覚醒したお腹に押しつける。

今日も立ち止まって、聞き耳を立てて、開くはずのドアの前で立ち止まる。

（うんちがしたいのに、うんちをするのが……恥ずかしいです）

今日もまた、自宅のトイレで排便する勇気が出ない。

（でもそろそろ、ちゃんとしておかないと――）

不安が右手を動かして、お腹からドアノブに伸びたとき。朝の無音の中にノイズが走る。

足音――一歩ごとに大きくなって、近くなって、チノに迫る。ハッとなって伸ばした手を引っ込めてしまう。
「あっチノちゃん！」
トイレのドアの前で顔を見合わせる少女と少女。トイレを目指して小走りに駆けてきた同居人のココアだった。
「ココアさん……。あの、」
「チノちゃん、今からトイレ？」
「もう済んだ、ので」
「そっか。じゃあ私入るね～」
偽りを感じさせない速さで返答すると、ココアは気兼ねなくトイレに入っていった。
とっさについた嘘を嘘のまま通すためには用を足した体を取るしかなく、トイレ横の洗面台で手を洗う。
（今日もうんちが……できませんでした）
手のひらの水気を切り、タオルで拭いているときだった。
「んッ、う～ん……っ」
ドア一枚向こう、トイレの中、便器の上に腰掛けるココアの息み声が聞こえてくる。明らかに大便を絞り出そうとしている無防備な声にチノはぽっと頬を赤らめた。
（ココアさんがうんちをしてます……私がいるのに）
排便は恥ずかしいことだ。誰もが改めて意識するまでもなく、例外なくチノも人に汚物が落ちる音を、外気に晒された臭いを嗅がれることを、そして便意を感じている／排便をしている／用便を済ませた後だと知られることに羞恥を感じる。
「ん……うんっ」
にちち　にちにちにち……ばちゃん！
生々しい踏ん張り声に遅れて水が跳ねた。トイレの中で何が起きているか想起は容易く、チノはよけいに顔を赤くするのだった。
（ふぅっ、ウンチ出た～）
ココアもハリと弾力を持ち合わせた瑞々しい両頬に朱を浮かべていた。だがチノの浮かべる恥じらいの赤ではなく、快の朱。自然な便意に導かれてスムーズに排便できた気持ちよさに上気していた。
硬くもなく柔らかくもない、適度に水分の絞られた黄褐色のバナナうんちが便器に浮かんでいる。
（早く離れよう）
「チノちゃーん？」
「え、はい」
まさか呼ばれるとは思わず困惑気味に返事する。
「まだ時間かかるから玄関で待っててー」
「はい……」
（ココアさん、恥ずかしくないのでしょうか）
チノがいるとわかって堂々と排便し、用を足しきるのに時間を要する宣言。
「ココアさん、私がいるんですから、少しくらい」
「んー、何か言った～？」
「いえ、なんでもないです」
その後は、言えない。言うことなんて、できるわけがない。
（排便するのに気を遣ってほしいなんて）

今に始まったことではないが、ココアは自宅での排便にためらいがなさすぎた。それを指摘する勇気もなければ、言う権利もない。家のトイレで大便をすることは、当然の行為なのだから。いくらココアが居候の……仮にも血が繋がっていない他人であったとしても、家人として当たり前に認められるべき排泄欲求を制限していいわけがない。

「んっ、うーん。う～んっ。はぁ。ん……」

にちち　ぽちゃ　にちみちち　ぶりっ

チノの気も知らずにドアを突き抜ける声量で踏ん張り、気持ちのいい音を立てるココア。制服のスカートを捲り上げパンツを下ろし、両手をグーに握って懸命に排便に勤しんでいる。

（もう行きましょう）

トイレを離れ、玄関で腰を下ろして靴を履く。

ぐるる……

座ったまま待っていると、お腹がわずかに唸りをあげた。

（うんち……したいです）

我慢をしている内に便意はだいぶ弱まっていた。それでもトイレに行って気張れば排便できるだろうし、放っておけば登校している内に消える程度には存在感のある便意だったが……。

まだ時間はある。ココアがうんちを終えた後に入って、お腹をすっきりさせてから学校に行くべきだ。わかっていても、今更靴を脱いでトイレに踵を返す気にはなれなかった。

うんちをする気力がなくなったから。わざわざ戻ってトイレに入れば大便だとバレるから。二度もトイレに入ることになり、お腹がゆるいと勘違いされるから。過剰に心配されて恥ずかしい思いをするから。音を聞かれるかもしれないから。

言い訳に失敗したら――用を済ませたとウソをついたことがバレてしまうから。

ココアの前でうんちをすることが恥ずかしい。という気持ちが露見することも恥ずかしい。できることなら香風智乃と大便／人間と排便という切って離せない存在を結びつけてほしくはなかった。

同じ住まいに暮らし、同じ食卓で、浴室で、そして便所で毎日の生活をしているのだから無理な話だ。

それでも。

「チノちゃんお待たせ～」

思想に沈んでいると不意に声をかけられてしまい。チノは両肩を跳ね上げる。振り返ると腹を擦るココアが背後に立っていた。うんちを出し終えて空になったお腹を愛撫する様は、いい子を褒める慈愛に満ちた手つきだった。

一方で便意をなだめるようにお腹を撫でていたチノはばつが悪そうに右手を引っ込めたのだった。

「行こっか」

「はい」

結局今日も、チノは家のトイレで大便をすることができなかった。

＊　＊　＊

ココアが下宿するようになって約一年。

はじめは気を遣い、遠慮しあって済ませていた朝の大きい方の排泄

を……チノだけが強く深く意識するようになったのがいつ頃からなのかは、チノ本人も覚えてはいない。

チノもココアも毎日一回、朝食後に催して滞りなく排便できる快便体質。最初こそココアは住まわせてもらっている負い目からか気兼ねして順番を譲るようにしていたし、チノはココアの用便の後に入ることを快くは思ってはいなかった。

よそよそしい距離感も親愛を紡ぐにつれ縮むようにはなった。

ココアは遠慮せず排便をするようになり、チノもココアの排便後に入っても不快感を感じることはなくなっていた。

許し合い、許容する家族の距離。

適度な間隔を崩したのは、ココアの方からだった。

『チノちゃんウンチ出た～？』

お節介、無遠慮、お姉ちゃん。朝食後、先にトイレに入ってゆったりと息んでいたチノに、突然ココアが声をかけた。お通じがいまいちでいつもよりも時間がかかっていた日だった。

『あの、もう少しかかるので、待っててください』

『いいよ～ごゆっくり～。チノちゃんがんばって！』

ココアも用を足したくて急かしているのだと思い、余計なお世話に口を曲げることなく排便に集中した。

しかし、『なんだか具合が悪そう。お腹痛い？』『ウンチ終わった～？』『いっぱい出てたね～。すっきりした？』

ドアの向こうからお腹の具合を尋ねてお節介を焼いて、トイレを出て鉢合わせると無遠慮に聞いてきて、チノの調子を気にしてお姉ちゃんぶって。

『ココアさん、その、ゆっくりしたいので静かにしてほしいです』

『そんなにお腹痛かった？　大丈夫？』

チノなりに大きい方の話題をやめてもらうように伝えたつもりだが、お腹の調子が悪いのだと勘違いされしつこくなる一方。

家族同然の存在だから、そうなったから……うんちの後に入るのも、入られるのも許すことができたし、できるようになった。しかしチノもまだ中学生。逐一具合を気にされて、自分の口で用便の調子を答えることは気恥ずかしかった。

学校でだって直接的に大きい方の単語を口にする女子なんていない。大親友のマヤとメグの三人同士でだって最低限のデリカシーは存在する。うんちと言ってしまうほど幼稚な年齢ではなく、どうしても大便をするときだって大きい方、お腹の調子が悪い、ちょっと時間がかかる……既に大人の領域に踏み込み始めた女子たちなりに、濁す／ごまかす／遠回しに伝えることは当たり前だった。

だけどココアはチノと二人きりのときは配慮しない。世話を焼く。お姉ちゃんぶって健康を過剰に気にかける。

黙ってトイレを譲り合い、お腹の具合が良くないときは軽く気にかける。心地の良かった距離感を容易に踏み越えられ、チノの方が折れることになった。

単純に、うんちをしていると思われることが恥ずかしかった。

――どうして、こんなに恥ずかしいのでしょうか。

身近な友人に、親友に、家族にお腹の中身を覗かれるような行為をされているから。

――どうして、ココアさんだと嫌な気持ちになるのでしょうか。

好きな人に、私と汚物を結びつけてほしくないと思った。

チノはココアを避けるため、トイレのタイミングをずらそうと意識し始めた。できるだけ早く大便を済ませるように。もしくはココアが済ませてからトイレに行く。

自分の大便の後にココアが入らないか様子を伺い、排便の最中も聞き耳を立てる。済ませたら急いで汚れを拭って、トイレを飛び出して。

うんちをすることが恥ずかしい。

家なら我慢しないでいい朝のお通じも、たまのゆるい便も、風邪を引いた下痢気味も。ココアが家のどこかにいるときは、真っ直ぐトイレに行くことができない。何をしているか探ったり、どこにいるか探したり、いつならトイレで出会わないか手探りで。

外でも、学校でも、友達の家でもないのに。家のトイレに入るのに勇気が要る。

うんちをするきっかけが欲しい。好きな人が来てしまっても臭いを残してトイレを開けられる覚悟が欲しい。大便をしていることを肯定しても平静を保てる気力が欲しい。

拙い理由で今日も大便ができなかった。

『だってココアさんが急かしてくるから』

後に入られると臭いを嗅がれてしまうから。

後に入ったって用が済むまで話しかけてきて、音を聞かれるから。

お姉ちゃんぶられてあしらうつもりでも、いつ本音が漏れて心にもない言葉をぶつけてしまうかわからない。

『ココアさんが何とも思わなくたって、私はイヤなんです。恥ずかしいんです。構わないで』

だけど、言えない。

『今日も朝にうんちができなかったのも、ココアさんのせいです』

そうやって人のせいにしてしまう自分が、またイヤになる。

＊　＊　＊

翌朝、チノは遅く起きた。大慌てするほどの時刻ではなかったが寝坊には違いなかった。すぐにココアを起こし、一緒にダイニングへ。

「チノちゃんがお寝坊さんなんて珍し～」

「私が起こさないと起きられないねぼすけさんなのに、そういうこと言っちゃだめです」

「えへへ……。夜更かしでもしてたの？」

「ちょっと……寝るのが遅かっただけです。その、勉強で」嘘だ。

「そっか～」

ココアは深くは詮索せず、トーストを頬張る。チノも朝食に集中しようとするが、あまり食が進んでいなかった。

眠りが浅くて頭が重い。そしてお腹も、重苦しい。

「ごちそうさま～。先に行くね」

不調にいつ気づかれるが用心していたが、ココアはさっさと食べ終えて身支度をしにダイニングを後にしてしまった。お節介お姉ちゃんも起き抜けのせいか目敏さに欠けているようだ。

（いつも一緒に食べ終わるのに、おなかが張っていて、あまり食べられないです）

結局チノは昨日、排便をする機会を得ることがないまま一日を終えてしまった。学校でも自宅でもトイレにこもる時間はあったが、タイミングと便意が合致せず排泄には至らなかった。

（おなかが、いたい……）

毎朝快便だった腸管は大量の便を溜める柔軟さを持ち合わせてはいない――便意を見逃し排便を諦め、積もり留めた排泄物は三日分。出口でせき止められ水分を枯らされ圧され固まって、お腹が痛い。

寝不足、体調不良、腹痛。はじめての便秘にチノの矮躯は疲弊していた。

「ごちそうさまでした」

ココアに大きく遅れて、朝食を採り終える。

ごろごろごろ……

（今日こそうんち、しないと……）

空っぽの胃袋が刺激されて、微弱な腹痛に便意が重なる。一日ぶりの排便欲で自然と足がトイレの方を向いていた。

（今逃すと、また出なくなるかもしれません）

三日も排便を先送りした圧迫感と、未体験の便秘による不安感。そしてつきまとう気持ち悪さから抜け出したいという希求。

歯磨きも着替えも後回しにして、トイレに辿り着く。

（ココアさんはもう、トイレを済ませてくれたでしょうか）

ドアノブの鍵は青色。まだココアは大便を済ませていない／もう済ませているかもしれない。

（五分以上も空いたんですから……きっと先に。多分）

ドアノブに手をかける。回す。ドアを開く。何かを確かめるように、慣れた動作をたどたどしく行って。入る閉める鍵をかける。うんちをしないといけない理由があったから、今日はすぐにトイレに入れた。

（うんち、したい……）

パジャマをショーツと一緒に脱ぎ下ろし、便座に腰掛ける。

しょろろろろ　ちょろろろっ

「すうぅ、ふーっ。んっ……」

寝起きに排尿は済ませていたので僅かに溜まったおしっこを排出し、大きく息を吸った。

お腹に力を込めて。出てください、そして来ないでくださいと祈りを込めながら。少女は秘められた排泄腔を静かに膨らませる。

（ココアさんが来てしまう前に済ませないと……）

仮にココアが朝のトイレを済ませていたとしても、油断はできない。登校の準備を済ませてチノがいなければ、部屋やトイレに探しに来ることは想像に難くない。

『ウンチ出た？』『お腹痛いの？』『遅刻しちゃうよ～』デリカシーに欠けた言葉の数々を無視して音を立てる勇気は持ち合わせていない。

当然ココアが朝のうんちを済ませていないなら、順番待ちの間に色々詮索されてしまう。トイレを空けたら出したものの臭いを嗅がれてしまう。快便バナナうんちの優しい臭いならまだしも、三日も溜めて発酵した悪臭は――

（ココアさんに心配されるかもしれません。ただの便秘なのに、お腹の具合が悪いかもって、それに、臭いのをかがれるのは……）

はじめての便秘を患ったチノだが、出るモノが臭いことは身を持って知っていた。

「あ、んんッ、ん……！」

ぶっ！　ぶぅぅっ！　ぷぅぅぅっ！

肛門の膨張感、熱を帯び、排便感がくすぐられる。窄まった蕾から高熱の気体が噴出した。わずかに腹腔の圧迫感が抜けていって頬をゆるませるが、立ち上る悪臭が鼻を突くと苦悶に顔が歪む。

（くさいです……。昨日のおならよりも、ずっと……！）

排便が滞って腸内環境が荒れ、悪玉菌が増殖することで発生するモノ。大便がよりも先に降りてきたのはおならだった。

（うぅ、まだ出ます……そっと、ゆっくり）

ぷすっ　ぱすっ　ぷすぷすぷす

息んで、締める。圧して、狭める。開いて、閉じる。下品な音を鳴らさないように、廊下にまで響かないように。楽になりたい欲を抑え、おならをすかして出していく。

友達がいる学校のトイレの個室で、店番中にバーカウンターに隠れて、私室で来訪者に怯えながら。我慢ができず繰り返した恥ずべき行為を、一人きりの個室で。

ぷしゅっ　ぱす

（はぁぁ……いっぱい出ます。気持ちいい、もう少し）

「ん……あっ！」

ぷすす　ぶっ！　プゥーッ！

抜けた声と情けない音が重なり合った。力みすぎて肛門が半端に開き、大きなおならが響き渡る。

（外に聞こえてないですよね　　う、恥ずかしい……）

熱と臭いに包まれて、童顔を赤くする。可憐でか細い少女には似つかわしくない、食べ物を腐らせて凝縮したみたいに下劣な臭気。さすがのココアも鼻を歪ませる気体を吸い込んでしまえば嫌悪を隠しきれないだろう。

恥をかいた時のことを想像してサンドイッチのトマトよりも顔が赤くなる。ほっぺに二つ、赤くて瑞々しい果実が生っていた。

（でもトイレの中ですから、換気してますから……早く出ないと）

「うん、っ。ん、んっ。んんん……ん～っ」

トイレを出たい。うんちを出したい。気持ちよくなりたい。

好きな人の前で、恥をかきたくない。

不本意な勇気で、踏ん張る少女。

「うーん、うんっ、はぁっ。んー……っ！」

ぷぷす　ぷすっ　ぱすっ　ぎちち

ぎゅっと目を瞑り、両腕を交差させてお腹を抱え、上体を倒して、いっしょうけんめいにふんばる。小刻みに屁を漏らし、甘い声をこぼして。

大人びていて冷静で、だけど時に子供らしく笑い、からかいに慌てる少女の、誰にも見られたくない必死な姿。

毎朝便意を催して、真っ直ぐトイレに向かって、座って軽く息んでするする出して、二、三分もすればお腹すっきり。学校で催す不運は滅多に訪れず、一日健康に過ごせる……はずだった。

便意は催すのにすぐにトイレに行けなくて、座って全力で気張っておならしか出なくて、五分かけても成果はなし。学校でしたくなって

ごまかして、一日不安に苛まれている。
（ちゃんと便意が来てるのに、うんちがしたいのに、勇気を出してトイレに入ったのに……どうしてうんちが、でないんですか）
直腸に便が到達したとき、便意が生まれて排便を促す。その排泄欲を先送りにし続けた結果、直腸のセンサー機能が次第に鈍くなって、便意が起きにくくなる。結果としてずっと大便が滞留してしまうことで、便意が不定期になる。
大きく育った便が小さな肛門を塞ぎ、うんちをすることにストレスを感じて更に腸の動きが抑制されて。些細なきっかけが連鎖して便秘を引き起こしているなどと、毎日快便だったチノに思い当たるわけがなかった。
（便意があるなら出ると思ったのに、全然出てこないです、っ）
昨日、具体的には昨晩、わかったことがある。便意を催していないのにずっと踏ん張っていても、うんちは出ない。
昨日の深夜、もう既に眠っている時間にチノはトイレにこもっていた。放屁が顕著になりお腹の張りが目立ってきて、ココアが寝静まったのを確認して一〇分近く奮闘したのだが……成果は言うまでもない。
体力を浪費し遅寝をして、寝不足お寝坊さんになって。どうすればいいのかわからないから、便意に従ってトイレに行くしかない。
「うぅんっ、ん、ん！　う～んっ……」
好きなときに大便ができなくなったから、便意が逃げない内に踏ん張るしかない。どれだけ親しく近寄ったって、便意はウサギみたいに逃げてしまう。トイレにこもった深夜の数一〇分で身を持って実感したことだ。そしてココアがいない内に、努力するしかない。腹筋に力を込め、声をもらして、やがて。
ぎちち　みぢ、っ
「あっ」
（お尻が膨らんできて、中から圧されてます。うんち、出そう……？）
触感のない直腸から、鋭敏な肛門へと送られ触れるもの。ごつごつとして硬く、荒々しい肌触りの何かを咥えた感覚。毎朝の慣れ親しんだ柔らかくつるんとした触感とは異なるものの、排泄腔から顔を出すものならば疑うまでもなくうんちだった。
（やっとうんちが出そうです。夜中どれだけがんばっても一欠片しか出なかったのに、よかった、もっと踏ん張って……）
寝起きからずっと元気のなかったチノの表情に明るさの笑みが浮かんだ。やっとうんちが出る、できる。
青い感情を上回った排便欲。恥ずかしさに勝る生理現象。うんちをしたくないと先送りにし続けて、うんちが出なくなって、やっと出せるという喜びに出会った。
「うう、うん、っ。ん、うん……う～んっ！」
難しい顔つきで、声を出して気張る。息を殺し、ドアの向こうの物音に過敏になりながら用を足す慎重さはもうなかった。溜めた分だけ膨らむ排便の期待感、重荷を降ろす解放感を想像してしまったら、人として生き物として無防備になるしかなかった。
「ふーっ！　うん、うん、うんっ。う～ん、ッ！」
ぎちち　ぎち　みぢっ
ぷすっ！　ぷすぅっ！　ふすっ　ふす

（うぅ、大きそうで硬そうなうんちのせいか、スムーズに出てきません。もうちょっとな感じがするのに、出そうなのに）

充分すぎるほどに肉はほぐれ、大きく開口した肛門が腹圧に連動して息を吐いている。だが……チノの想像よりも硬く太く、そして大きく育った大便の弾頭がなかなか動かない。更に数日分の消化物が後続に詰まっており、柔らかく軽いバナナうんちしか押し出したことのない腸パイプではパワー不足だった。

着実に出口に向かってうんこは動いている。お腹の中に沈んだままの大便が存在感を放ちながら、押し出されている。

でも、まだ出ない。

「う～んっ！　う～～んッ！」

（早く出てください、うんち、早く……！）

焦る。直腸を圧し続ける不快感から解き放たれたくて、いつすっきりできるかわからない不安から逃れたくて、刻一刻と過ぎていく時間がもたらす結果を恐れて。

「ふぅぅっ、ぅん、んあ……んん、んぅ」

（もうちょっとな気がするのに、お尻のすぐそこまで来てるはずなのに、便意があるのにどうして出ないんですか……）

みぢっ　みぢ　みちち

それでも、粘膜を擦る感触があるから止められない。出るはず、なのだから――いつかは。

みちゅ……

「あっ」

（出そう、かも）

硬くて歪な塊で、ぐっと肛門の肉を押し広げられた感覚。バナナうんちのそれと触感は異なるものの、固形の便が出ると本能的にわかった。期待感と解放感が斜め上に伸びて、絡まり合って。

「ん……っ！」

ぎぢぢ　みち……　ぽちゃっ

（うんち、でた……？）

肛門を通り抜ける肩透かしな感覚と、間抜けな着水音。

チノが予感していたのは膨らんだ孔から大きい塊がどぼん！　と、落下してお腹がすっと軽くなる……一回で排便欲が満たされる摩擦と景気のいい着水音。しかし予想とは裏腹に直腸には露骨に便意を放つ不快感が残っている上に、直下に聞こえたのは石ころでも落としたようなかわいい音。

実際チノがようやく捻り出したのは、お腹で育てた便秘うんちの一部が千切れたものだった。股を開いて便器を覗き込むと、小さくて黒ずんだころころうんちが沈んでいる。

（あんなにがんばったのに、踏ん張ったのに、これだけ……）

初めての便秘で勝手がわからないなりに努力をしたのに、時間をかけて息んだ結果が、一粒。毎朝快便ガールだったチノにとって、見合わない成果に違いなかった。

徒労感と、まだ秘める岩塊に注ぐ労力を想像して、肩を落とす。

（このまま放っておくと余計に出なくなってしまうかもしれません……。もっと息まないと、う～んって）

こんこん！

「ひゃっ！」

突然のノックに鼓膜を殴られ声が跳ねた。
「チノちゃん？」
「え、あ、ココアさん……」
いつの間にかトイレに来ていたココアの呼びかけにチノの心臓が早鐘を打つ。
（全然足音なんかしなかったのに、ココアさん、いつから、うんちしてて、気づきませんでした……！）
「チノちゃんどうしたの？　お腹でも痛いの？」
「いっ、いえっ！　ちがいます！」
「だってさっきからすごい声で、」
「いつから聞いてたんですかっ!?」
「えっと、一分くらい？」
（そんなっ、もうちょっと出そうな感じになって一生懸命踏ん張ってたのをずっと聞かれてたなんて……！　うんちが出そうで油断してココアさんの接近に気づかなかったなんて恥ずかしすぎます！）
お尻の穴は中途半端に開いたままで、出口のすぐそこに硬くごつごつとした何かが留まっている感触がある。まだ排便は終わっていないのに――慌てて紙を巻き取り、お尻に押しつける。
（もうトイレにこもっていられないです！）
「もういいの？　ウンチぜんぶ出た？　私まだ待てるよ？」
ガラガラとうるさい巻き取りの音を聞いて、ココアが尋ねる。
「もう済んだ、じゃなくて、なんでもないですから！」
腰を浮かすとお尻が狭まって膨らんだ肛門に、乱雑に手で固めて咲いた造花を押しつける。僅かに絡まった茶色を避けてもう一度白色を擦りつけ、見た目上はきれいなのを確認して便器に落とし、すぐさま水を流した。
隠しきれない、繕い忘れた焦燥がココアに真実を語っていると気付けるわけもなく。
袋小路と化したトイレから逃げたい／ココアの追求から逃れたい。勢いよくドアを開けると、一歩引いて立っていたココアと目があった。
純粋すぎるほどに心配しているまん丸な目玉が、チノを見つめている。茶化すことも面白がることもしていないと一目で理解できる、できるからこそ、チノの青いこころは余計にささくれ立つ。
「チノちゃん、もう大丈夫？　お腹ゆるいの？」
「なんでもない、ですから」
心配してくれている。案じてくれている。寄り添ってくれている。嬉しいはずなのに、イライラする。
嫌がっているのに、踏み込んでくる。それが善意だったとしても――チノの〝恥ずかしい〟に、ちっとも気配りしていないから。
「私気にしないから、ゆっくりウンチしても、」
「うんちなんかしてませんっ！　ほっといてください!!」
言うべきではないと喉で引っかかった大嘘を、止められなかった。
「チノ、ちゃん……？」
「あ、あっ、その、ごめ……着替えに行きますから！」
（恥ずかしい恥ずかしい恥ずかしいっ！）
洗面台で乱雑に手を濡らしてから、トイレから離れていく。わざとらしく足音を響かせて。そうしないと心臓の張り裂けそうな音が誰かに聞こえてしまいそうだったから。

取り残されたココアは、呆然と廊下の先を見つめていた。
「どうしよう……」
怒らせてしまった。それはわかるのに、何を選び違えたのかが、わからない。
（うーん、そんなにお腹痛かったのかな。あとで、謝らなくちゃ）
まずかったと思って一〇秒か二〇秒立ち尽くして、便意が急かしてきたので半開きのドアに吸い込まれることにした。
（あれ、別にトイレ臭くない）
想像していた悪臭はなく、怪訝に思いながらドアと鍵を閉める。いつもと変わらない、空間と便器。制服のスカートに両手を差し込んで、ショーツを下ろしながら着座する。
（流してからまたしたくなって座ってたのかも。お腹の調子が悪いときに、うるさかったかな？　ゆっくりウンチしたかったかもしれないのに、ん、ウンチ出る……邪魔だったよね。はぁ、出たぁ）
にちにち　ぶりぶり　ぼちゃん　ぶりりっ
正確さに欠ける反省をしながら、軽く息んでウンチを出す。昨日と変わらない、悩みも恥じらいもない快便だった。二本のバナナウンチの後に排尿をして、お尻を拭きトイレを終えた。
「ふぅ、スッキリしたっ」
（歯磨きしようっと）
手を洗い、トイレ横の洗面台で歯を磨く。
（チノちゃん、着替える前にウンチしてたってことは、やっぱりお腹の具合悪かったんだよね。ということは、まだ歯磨きもしてないよね）
いずれ来る気まずさを意識した瞬間、ついさっきの踏みしめる足音とは対照的な……床板がわずかに軋む忍び足で。チノが来た。
ココアが横に避ける。いつもよりからだ半分、遠くに。
チノが歯ブラシを取る。普段よりも一歩多く、離れて。
口内で練り歯磨きを泡立てている間は、ブラシを咥えている間は無言でいられる。
鏡越しにチノを見る。目が合った。逸らされる。
怒っているのともう一つ、ココアがわからない感情で顔を赤くしているのはわかった。少なくとも口を聞いてくれないほどの逆鱗に触れたわけではない、そう感じる。勝手な思い込みかもしれないと自戒しながら、ココアは様子を窺う。
チノもまた一瞬だけココアの顔色を覗き見た。困惑でそわそわしている風に見えたことに少し安堵した。心の底から心配してくれた献身をはね除けたせいで嫌われたんじゃないかと、気にしていたから。
（出発する前にちゃんと、謝らないと）
距離を詰めすぎて小さな兎さんの尻尾を踏んだ子が決意する。
恥をごまかすあまり自称お姉ちゃんを突き飛ばした子が決心する。
だけど、ごめんなさいが言えなかった。
口を濯いで無言の理由がなくなっても。
家を出てからのぎこちない無音を疎っても。
時間が経つごとに募る罪悪感が急かしても。
お互いに上っ面だけの雑談で間を繋いでしまう。
そうして共通の通学路の終わりに着いて離れることができて、ほっとした。そうして、帰ったら次こそは……と意気込んだ。
八時間後、二人はラビットハウスで再び顔を合わせる。

「ココアさん、コーヒーをあちらのテーブルに」
「うん、まっかせて〜」
結局言えなくて、言えないままで、時間だけが過ぎていく。無為に消費されていく時間が解決してくれると願って、何事もなかったかのように店番をこなしていた。
一人はしきりにお腹を擦り、時折お尻の穴をぎゅっと引き締めて。
一人はリゼにすれ違いを悟られないよう気丈に振る舞って。
（はぁ……おならがしたくて、しょうがない。だめです、トイレ、ちょっとだけ）
今までは押さえ込めたガスの圧力も、ふとした衝撃で漏れそうだった。学校でも帰りの道でも、休み時間や誰もいない隙にガス抜きをしなければならないほど、チノのか細い腸管はおならの耐性に乏しかった。
「あの……ちょっとお手洗いに」
頭に乗っけていたティッピーを下ろし、リゼに声をかける。
「ああ。やっぱり具合でも悪いのか？」
「えっ。あ、いえ、そういうのじゃないです」
何度も顔を歪めて放屁や腹痛を堪えていたのを見られていた。努めて冷静に否定して、住まいの方のトイレに駆ける。
バタン、ガチャ。……ぶぅぅっ。
ドアと鍵を閉め、我慢しきれなかったガスが漏れる。しかし繕う必要もはたく必要もない。
（一応トイレに座って、しましょう）
カフェの制服スカートを捲り上げ、パンツを下ろしながら着座。
そして――。
「はぁぁ……！」
ぶっすぅぅぅぅぅっ！　ぶぅーっ！
「んん……っ。ん……はぁ、ぁ」
閉じ続けていた肛門を解き放ち、熱っぽいガスで振動させる。はしたないとわかっていながらも、ためらいなく排泄欲に身を委ねられる快楽に声を喜ばせずにはいられなかった。
（くさいのがいっぱい、あつい、きもちい）
ぶすぅっ！　ぶぅぅーっ！　ぶぶすすぷすぷすぷす！
放出されたおならが体温のあたたかさで、緊張していた過敏な孔を撫でていく。腹腔の膨張感が抜けていく名状しがたい浮遊感。たちこめる悪臭に呼吸を止めながら、軽く息んで減圧を促していく。
「ん、んぅ。んふ……」
ぶすぅぅぅ……　ぷりりりり　ぷ　ふす
人前での放屁を忌避する感情があるように、おならを出すことは擬似的な排泄であった。
だからチノが便器の上で行っているのは、実体のない排泄。出すことは、気持ちいい。四日もまともに排便ができていない少女にとって霞を食むように空虚な行為であったとしても……。
（ふぅ……きもちいい）
便秘は一歩たりとも解消されていないが腹の張りはゆるめられたし、しばらくはガスの誘惑にくじけることはなさそうだ。
情けない音が止み、傾いた太陽光が差し込むトイレに激臭と少女の吐息が入り交じる。

（おならが出せてちょっぴりだけすっきりできました。誰も聞いてないはずですけど、いっぱい出て恥ずかしいです）

「……あっ」

くるるるる

にわかに軽くなったお腹の方から、空気の動く音がした。またおならがしたくなったのかと思ったが、そうではない。

（ん、うんち……）

放屁につられてお腹が動いた。腸管が蠕動して、腹が鳴る。

（ちょっとうんち、したくなってきたかも……です）

便意を感じた途端に、直腸に鎮座したままの硬質便が存在感を主張してくる。どれだけおならを出したって便秘のままに変わりないということを突きつけてくる。

（うんち、出るかも）

本日二度目の、貴重な便意。

お尻丸出しで着座しているので、すぐに排便ができそうだった。お客さんが落ち着いたタイミングまでトイレは我慢したし、接客中のココアはチノが席を外しているとわかれば、店を放り出して用を足しに来る可能性は低い。

（……いえ、戻りましょう）

一応紙でお尻を拭いて、立ち上がる。下着を上げて着衣を整え、水を流してドアを開ける。残留したおならで息苦しいトイレから、澄んだ空気の洗面所前でようやく深く息を吸う。

（どうせ出るわけないですし、時間がかかったら、いやです）

朝食後の、今より強い便意ですら何分も懸命に気張ってようやく一欠片落ちただけなのに、催したばかりの便意ではいくら時間がかかるかわかったものではない。

（リゼさんに心配かけますし、……ココアさんにお腹壊して時間がかかってるって思われるのも、恥ずかしいです。今ならおしっこの時間の範疇のはず）

手を洗いながら自分に言い聞かせて、そそくさと戻る。

「戻りました」

「ちょうどコーヒーの注文が入ったぞ」

早めに済ませたおかげでリゼは怪しむことはなかった。

（よかった。リゼさんは私が便秘だと知ったら親身になってくれるでしょうけど、熱血そうなので伏せるに限ります）

ころろろろ　ぐるる

（まだちょっとだけ、うんちがしたいです。でも、今日も夜中にがんばりましょう。今はまだ、我慢です）

そうやって数少ない排便のチャンスをふいにするせいで便意を感じにくくなるということも、排便できなかったストレスが作用して便が出づらくなることも知らない。

「あ、戻ったんだ。……コーヒー、持って行くね」

「はい、お願いします……」

（トイレに行っているの、見られてたみたいです。何も聞いてこないし、大丈夫ですよね）

便秘とストレスと恥と不安とココアへの少しだけの怒りと自分への怒りと、ココアさんが悪いと言い切れない良心の呵責。

全てに折り合いを付けられないまま憂鬱な一日を過ごすのだった。

＊　＊　＊

掛け時計の長針が一秒置きに時を刻む。

正確に時を告げる。チノがどれだけ深い悩みに両足を沈ませていても、寝ていても、起きていても関係無く。

不気味なほど大きく聞こえる針の歩み。寝入るまどろみの揺らぎのさなかでも、寝起きの半覚醒状態でも耳に刺さることはない、小さくて静かな駆動音のはずなのに。

じくじくとお腹が痛んで眠れない。

ちくたくと時計の音が気になって落ち着かない。

ぐるぐると悩みが渦巻いて瞼が落ちない。

（時計がうるさいときは、決まって具合の悪いときです）

風邪を引いて学校を休んだ日はずっと。お腹を壊して寝込んでいるときも腹痛で寝られなくて針の独り言がよく聞こえた。

毎朝快便だったチノにとって四日も排便ができていないのなら立派な不調だろう。

（結局、ココアさんにごめんなさいができませんでした）

歯磨きが終わってから、出発前のひととき、通学路を分かつとき、帰ってきて更衣室で再開した瞬間、店番の間のどこかで、夕食の席で、それこそ相手が寝る前に私室のドアをノックすれば。

一日の大半を同じ屋根の下で過ごす二人は、その気になればいつだって自分の非を認めてすれ違いを解消することができた。

ぷっ　ぷす　ふすす

かけ布団の中で気泡が割れる。深夜の私室でなら遠慮する必要はなく、チノは布団に潜り込んでから幾度と細かい放屁を繰り返していた。

月曜日の朝にこそこそ排便を済ませてから、まともな量を吐き出せていない細い腸管は、臭いも硬さも重量も日々増している便のせいで悪性ガスが充満している。

「はぁ……」

横たわった姿勢から片足を上げて布団を持ち上げる。臭いを逃がしてから閉じるも、残留した気体が顔の方に漂ってきた。眉を寄せる。

（うんちがしたい……）

お腹は痛い。でも、うんちはしたくなってない。だけど、うんちがしたい。快便のときみたいに自然に催してするする出して、ちゃんと健康に一日を過ごしたい。

背中を丸めてお腹を擦る。鈍く微弱な腹痛が慢性的にあり、お尻の出口つまり直腸部には硬い圧迫感と不快感がある。教科書で見た覚えのある人体の解剖図を思い浮かべてお腹をなぞってみる。

「っつ」

おへその下、ちょうど直腸のS状部を指で押した。柔肌と脂肪の層の、更に下に硬く押し返す感触がある。

（うんちが残ったままで、お腹が膨らんでいます）

着衣ではわかりづらいが、痩せ気味のチノの下腹部はぷくりと丘状に膨らんでいる。細い大腸は数日程度の便でぱんぱんになり、体脂肪が少ないのも相まって中から外へ圧されている。

左手の方向に横へ撫でる。脇腹までなぞったら、腰の輪郭に沿って、腹の皮膚に人差し指と中指を這わせる。境界線はわからないけれど途

中で膨らみは感じられなくなった。

（うんちがたくさん詰まっています。もしこのまま出なくなったら）

考えたくなかった。お腹を触るのをやめて、深く布団を被る。このまま眠ることができたなら、数時間だけは腹痛も不安も忘れて時間を飛ばせるのに。そう思わずにはいられなかった。

（明日になったら、ココアさんに謝れるかな）

デリカシーのないココアが悪い。嫌がってるのに善意を押しつけてくるココアの方が悪い。先に嫌なことをしたのはココアなのだから、先に謝ってほしい。

そうやってココアをわるものにして、自分の怒声と態度を正当化しようとしてしまう自分が、いやになる。

（私がうんちを恥ずかしいと思うのが悪いのに。でもココアさんだってゆっくりトイレしたいのを邪魔してくるんですから。余計なお世話なんです……。だけど、でも。心配してくれているのに）

ココアは心の底からチノの不調を案じている。チノもそれを実感しているからこそ、何歩も余計に踏み入ってくる親切さが／遠慮のなさに強い羞恥を抱いてしまう。

好きな人に自分のうんちの臭いも音も、排便しているという事実さえ隠したい。腹を下して便意に抗えなくて目の前でトイレに駆け込む痴態は絶対に見られたくない。トイレ中のココアを急かして順番を代わってほしいと懇願する事態を想像して、顔が真っ赤になる。

きれいなお腹の下は便秘を患っていて汚物が詰まっているなど、想起させたくない。健康でつるつるな茶色なんかではなく黒ずんだカチカチがたっぷり眠っているなどと、知られたくない。澄ました顔をしているけどおならを我慢をしているなんて、人知れずトイレに籠もって整った顔を歪めているなんて、誰だって気づかれたくない。

――好きな人に、汚い姿を想われたくない。

チノが大声で拒絶したせいか、ココアは余計な詮索をしてこなくなった。だが謝れないままのせいか会話はぎこちなく、怒らせまいと気を遣っていることがひしひしと伝わってくる。

割り切れなくて言い出せないチノと。

気軽に謝ってしまったら油に火を放り込むのではと気後れしているココアと。

お互い様のことで許せないほどではないから、迂闊に触れたら悪化すると思っているから、終わったことのようにしてしまう。

くるるる……　ぷすす　ぷすっ

（眠れないですし、便意はないけど、疲れるまでトイレに……）

ちょっとお腹が鳴ったのをきっかけにベッドから這い出る。時計の長針と短針はてっぺんの零時を越えていた。

（どうせ明日は土曜日でおやすみですし……あ、だからこそ今出せるだけ出しておかないと）

どちらかに外出の予定がなければ学校のある平日以上に同じ空間で過ごす時間は長くなる。おならを我慢できなくてバレたり、トイレのタイミングが被ったり。今から不安でしょうがない。

ひそひそ隠れるようにトイレに向かう。電気はついていないがそっとノックをして、照明と換気扇をつけてから入室。

ぽたん　かちゃ　ばさばさ　ずる　ぺたっ

（どうせ出ないでしょうけど）

パジャマとショーツは足元まで落として片足を抜き、深く座り込み膝は大きく開いて。無駄なあがきとわかっていても籠城体勢。

しょろろろろ　じょろろろじゅいいいい

「すぅぅ、はぁぁ」

中途半端に溜まっていたおしっこを済ませて深呼吸。一度眠ればすぐには起きないココアが寝静まる深夜だけが、チノが安心してトイレを利用できる唯一の時間になっていた。

さすさす　すりすり

ゆるやかに膨らんだ下腹部を撫でてみる。

（起きてください……いつまで寝ているんですか）

四日以上だんまりを決め込む不眠の原因を、あくまで優しく愛撫する。どれだけ苛立ちをぶつけたって蛇腹は波打たないし、お尻は開かない。

恥ずかしくて排便をためらって腸を詰まらせているのは自分のせい……ココアに八つ当たりしても自分のお腹に不満をぶつけても解決しない。

「ふぅ、っん、っ。んん……！」

だから、息むしかない。

はじめてのソロキャンとおなかいたい

ゆるキャン△　志摩リン

色々調べてきたつもりだったけど、やってみると全然違ったな。

初めてのソロキャンプは失敗ばかりだった。

テントを設営する、枯れ木に火を着ける、野外でご飯を炊く……。本で見ただけ、頭で考えただけの知識ではどれもうまくいかなかった。

テントを固定するためのペグは曲げてしまうし、ご飯は芯が残ってしまうし鍋も焦がすし、火をおこすのだって一人じゃできなかった。あのときは見回りに来ていた管理人さんに教えてもらって、なんとかできたけど。

まだまだ慣れないし分からないことだらけだけど、いつかは全部一人でやれるようになりたいな。

でも人に聞けるときや頼れるときは、強がらずに助けてもらおう。

失敗を重ねて、デキるキャンパーになるぞ！

……。

ずるずる　ずるる

炊飯に失敗した夕暮れ時、どうしようもない私の空腹を助けてくれたのはバッグの中に入っていた、カレーめん。

『食べ足りなかったら、非常食が入れてあるよ』

私の不安を見透かすようにかかってきたお母さんからの電話と、失敗を予想していたかのような助け船。お湯を注いで三分で出来上がりの、インスタント麺をこっそり忍ばせてくれていた。

「……おいしい」

何度も食べたことのある、味――じゃなかった。

冷え込んだ湖の空気をはね除ける、どろっと熱いスープ。マイルドだけど香辛料も効いた、万人に受け入れられるカレーの風味が口を喉を胃袋を加熱していく。

サイコロ状にカットされたお肉を噛めば豚肉の味わいが染み出て、カレーと混ざって味覚を刺激する。ジャガイモもにんじんも小さいけれど、咀嚼してすぐ口の中で溶けるのも悪くない。柔らかい野菜の中にみじん切りのたまねぎが混ざっていて、噛むと酸味が弾ける。

カレー味で口の中を満たしながら、麺をすする。スープがたっぷり絡む平打ち麺は食べ応え抜群だ。

箸が止まらない。スープの一滴まで飲み干して、完食。

「ごちそうさまでした」

ただお湯を内側の線まで入れて、一八〇秒待っただけなのに、すっげーうまかった！　今まで食べたカップめんの中で一番うまかったんじゃないか……。

すごいぞ、キャンプ飯効果。

しっかりと料理ができたら達成感とかも相まってもっとうまくなるんだろうか。

スープカレーと思い込んで食べようかと思っていた未開封のレトルトカレーをしまいつつ、ほっと一息。

あー、カレースパイスのおかげでお腹があったかい……。食休みもかねてしばらくは焚き火に当たりつつゆっくりするか。

ぶるるる

「んっ」

空腹を満たしたら、おしっこがしたくなってきた。
身体はあったまったけど日が暮れてきて風が冷たい。肌の熱が持っていかれて身が縮こまって、どんどん尿意が加速していく。
トイレ……。
重々しく腰を上げて、立ち上がる。
まだ余裕はあるから、少し散歩しながらトイレに行こう。夕焼けの赤が跳ねる本栖湖を眺めながら、湖畔を歩く。湖の向こうには富士山がそびえ、見る度に空、湖面、山と色が変わって飽きることがない。森の中にもテントサイトはあったけど、湖のそばにしてよかった。
でも、トイレや水場が遠いのが難点だなー。他の人がいないところを求めて、かなり遠くの方に設営してしまったみたいだ。
湖畔から切り開かれた道に踏み入り、森の中へ。
目的のトイレは道なりに歩いて数分のところにある。焦がした鍋を擦った水場すぐ近くだ。隣には駐車場があるけど、車は数台だけ。遠くに見えるテントサイトもあまりテントが立ってない。湖畔もちらほらだったし、ゆったりキャンプが楽しめそうだ。
ってもう夜だけどなー。
「っと、トイレトイレ」
女子トイレのドアを開け、中に入る。何気にここのキャンプ場のトイレに入ったのは今日初だ。キャンプの受付前に近くの公衆トイレでおしっこしたっきり。
中はちょっと古めの公園トイレって感じだ。でもばっちいって感じじゃないし、気軽に使えそうだ。でも、道路沿いのトイレの方が断然キレイでよかったなー。
今から公衆トイレの方まで行こうかな。でも、テントからここまでの距離を考えると倍以上かかるし、途中上り坂だし。
うーん、寝る前や朝にトイレを済ませることを考えると、近い方のトイレに慣れておかないとな。別に汚すぎるわけじゃないし、他のキャンプ場がここより快適とか限らないもんな。
個室が五部屋、一列に並んでいる。一応全部見てみると和式と洋式が半々……洋式の個室に入る。
と、その前に。トイレは寄付制の有料なので、入れ物にお金を入れるのを忘れない。
温水便座じゃないけどちゃんと掃除はされているみたいで抵抗感はない。トイレットペーパーも予備がちゃんと置いてあるな。
いそいそと脱いで腰掛けて、むずむずと急かしていた尿意を解放する。
「ふぃ〜……」
じょろろろろろじょぼじょぼじょぼじょぼ……
結構な時間トイレ行ってなかったから、いっぱいでるぞ……。初めて一人の環境であれこれやって、やっとご飯を食べられて緊張が解けたんだな。
じゅぼぼぼぼぼ　しぃ〜〜〜っじょろじょぼじょぼぼぼ
ぬくい液体が抜けていくのが、気持ちいい。
しゅいいいいい　しゅおおっ　ちゅおっ　ちゅぽぽ……
ぶるっ　ふるる　ちょろっ　ちゃぽっ　ぴちゃん……！　おしっこ、いっぱい出たっ。
解放感に浸るのもそこそこに後始末。個室から出て手を洗い、外に

出るとかなり暗くなっていた。ぼーっとしていると真っ暗になってしまいそうだ。寝る前のトイレ、明かりを用意しないと危なそうだ。あ、トイレと言えば……。

うんこがしたくなったら、ここでしないといけないんだよな。

当然すぎるんだけど、意識してしまう。

キャンプ場内唯一のトイレだし、他の利用者が集まるだろうし、朝は混雑しそうだ。見知らぬ他人とはいえ、となりでうんこするのはちょっと恥ずかしいかも……。

朝は早めに起きて、人気のない内にうんこしよう！

慣れない環境で催すかわかんないけど、今朝は家で踏ん張っても出なかったし……多分翌朝にしたくなる気がする。

設営して遊んでたくさん汗をかいて、いっぱいキャンプご飯を食べて、ぐっすり寝たらうんこが出る。当たり前のことなんだ、家じゃないんだから他の人と同じトイレで済ませるしかないんだ。

慣れるために、これからは便意を催したら我慢せずうんこするぞ。

……と、こんな決意を先にしておかないといけないほど、やっぱりうんこは恥ずかしい。今日は閑散としているからいいけど、人気のキャンプ場の朝のトイレはすごく混むっていうし。行列ができていてもうんこができるようになっておかないと。

さて、真っ暗になる前に有料シャワーを借りてさっぱりしておこうかな。どうせ焚き火で煤くさくなるけど。

＊　＊　＊

日中は忙しくて全然読めなかった本を読み終えた。

さすがに日が地平線の向こうに沈んでからは黒い文字の羅列を追うこともままならなくて、月明かりと揺らぐ火の橙に加えて、ランタンに頼ってページをめくることになった。

「あー、目がしぱしぱする」

限定的な光量で読了したのと焚き火の熱でかなり目も肌も乾いてしまった。目薬とか化粧水の準備がいるかもなー。今日はしょうがないとして、これから覚えて学んでいけばいいか。

「うぅー、さむさむ」

熱すぎず、寒すぎずなんて都合のいい場所取りができなくて、どうしても焚き火の当たらない背中が冷えてしまった。湖の方から吹く風は冷たくて、そよ風でもあっという間に熱を奪っていく。

「くぁぁ……」

本を読み終えて集中力が途切れ、一気に眠気が押し寄せる。あれこれ疲れることがあって、さすがに体力も限界か。

初めてのソロキャンだしがっつり夜更かしして楽しみたかったけど、早く寝よう。その分早起きして早朝の本栖湖を散歩しよう。

睡魔が激しく踊ろうとも最低限のことは忘れない。焚き火はバケツに溜めた水でしっかり消化して、本は片付けて寝袋に入って……あ待って寝る前にトイレ横になってしまった起き上がらなきゃトイレ。それに寒いからもう少し着込んで、トイレ、あったかくして。あ。

おしっこしておかないと夜中に起きる……はよといれ。あ。だめだねむい。

……。

……。

起きた。

張り付いた瞼を開けると、ぼやけた視界はまだ暗い。

ぶるぶる

ちゃんと着込んで寝袋に入ったはずなのにほんのり寒い。

っていうか、といれ、いきたい……。おしっこ。

眠気に抗いつつ寝袋から一分かけて手を出して、携帯電話に手を伸ばす。手探りで四角いものを引き寄せて、電源ボタンを押す。

「午前、三時……」

まだ深夜じゃんか。どうりで明るくもなってないわけだ。もう一時間か二時間遅く催してれば、おしっこついでに散歩も楽しめたのに。

「はぁ〜、めんどくさ」

寒いから寝袋から出たくない。眠いからこのまま二度寝したい。遠いトイレまで歩きたくない。暗いから動きたくない。

おしっこ、めんどくさい……。横になる前にがんばってトイレに行っておけばよかった。このまま明るくなるまで眠って、ちゃんと目が覚めてから、少しでもあったかくなってから外に出たいぞ……。

でも尿意が気になって眠れそうにないし、万が一おねしょってことになったらさすがにやだな。

初ソロキャンで初おねしょ？　今日は散々失敗したけど、さすがに小学生じゃあるまいし……！　寝袋とテントを台無しにするわけにはいかないぞ。

「でも、ねむー」

眠い寒い暗い。微妙な尿意と半端な眠気ともどかしい体温のままうとうとするのも、悪くない……かも。

いっそ人気のない深夜なんだし、テント出てすぐの茂みでおしっこ――はマナー違反か。よほどのピンチじゃない限り、トイレに行くぞ。

でも今はピンチじゃないから、ほんとに我慢できなくなるちょっと前にトイレ行こっと。

くるるる

ん……。

おへその下、膨らんだ感じのある膀胱は「はよトイレ行けやー」とじわじわ圧を発している。でもごぽごぽとかちゃぷちゃぷとか、自己主張はしていない。だからこの音は、

ぐるるる……

お腹がアピールをしている。

「ん、んん……」

う、うんこ……。

なんだか大きい方もしたくなってきたな。おしっこしたくて起きたと思ったら、うんこもかよ。仲良しか？

一日ちょいうんこ出てないからそこそこ大きいのがお腹で必死にアピールしてるぜ。「おしっこのついでにうんこも出せや」って。どうせ家帰るまでにしたくなってキャンプ場の狭いトイレでブリブリしなきゃいけなかったんだし、いいんだけど。

「はぁー、うんこしてぇー。行くかぁ」

よく考えたら日も昇ってない深夜だし、トイレは誰もいないんじゃないか？　今トイレに来るのなんて寝る前に用を済ませなかった人

か、運悪くお腹を壊した人ぐらいだ。私じゃん。
誰もいない静かなトイレでのびのびおしっこして、まったりうんこもして、最高の二度寝も悪くないなー。
ごろごろごろ　ぐるるるる
腹も減ってるんじゃないかってくらいめっちゃ鳴る。静かだから自分でもはっきり聞こえるし、どんどん便意も増してくる。
ごろろろろっ　ぎゅるるるる
んん？　なんだかお腹の音が変わってきたな。それに――。
ぎゅるるるるるっ！　ぐるるるる！
「っつ、たぁ……」
腹が痛くなって、急にうんこがしたくなってきた！
やっぱ……腹がゆるい、柔らかいうんこが出そうだ。
毎日快便ってほどじゃないけど一、日に一回の頻度でちゃんとうんこが出るから、腹がゆるいときはだいたい理由がある。女の子の日だとか、脂っこいものを食べ過ぎたとか、風邪を引いたとか。
熱はないし、食べ過ぎも何も夕食はカレーめんだけ。そんなに辛くなかったしお腹に効くほどじゃないよな？
「さっむ」
腹がぐるぐるし始めてから、寒気が際立ってきた。具合が悪いとき特有の悪寒が全身を包んで鳥肌が立つ。
もしかして、お腹冷やした……？
確かに寝る前はちょっとの寒さを我慢して本を読んでたし、眠くてすぐ横になったからちゃんと防寒の準備をしたとは言えない。夜風にずっと曝されて体力を奪われたところで着込み足りないまま寝てしまったら冷えで腹がゆるくなってもおかしくないか。
「うぅ、トイレ……」
おしっこはまだ我慢できるけど、うんこはちょっと無視できなさそうだ。ぎゅるぎゅるしてるし、ゆるめだし。寝袋が保つあったかさに後ろ髪を引かれながら、なんとか這い出ることに成功。
「おしっことうんこ済ませて、さっさと寝よ」
朝になったら勇気を出してうんこするぞって決意はしたけど、よりにもよって我慢できない軟便うんこで、それもまだまだ真夜中……。外で一泊するんだから普段よりも体調に変化が訪れるから、しょうがないけど。
テントの片隅に脱ぎ散らかされたままのダウンを着込み、外へ出ると――。
視界いっぱいに暗闇が広がっていた。
「……えっ」
寝る前と違って空は雲で覆われていて月明かりはないも同然。もちろん星一つ見えない曇天だ。
そして、人工の光がない。
自分のほかにも湖畔にテントを設営していた人はいたけど、寝ている時間だから焚き火の橙もランタンの暖色光も灯ってない。山の方から吹き下ろされる夜風が本栖湖の水面を撫で、優しくて耳心地のよいさざ波の音色を届けていた。
波打ち、岸辺に跳ねて、ざざん、ざざぁん……。
ぎゅるるるごろごろっ！　ぎゅおぉーっ!!
って、優雅に波音を聞いている場合じゃなかった。下品な腹の音が

鳴り響いちゃってる。
うんこが出そう……。早くトイレ……！
でも、スニーカーを履いた足が動かない。
広がる闇で数歩先すら見えなくて、身が竦む。
街灯すらない空の下で、本当に自然の真ん中にいるのだと嫌でも自覚させられる。蛍光灯だとか付けっぱなしのテレビだとか、携帯電話の液晶だとか。自宅で眠っていたってどこかに明かりはあって、それに慣れてて、頼りきってて。
とにかく言いたいのは、暗すぎてトイレまで行けるわけない！
そ、そうだ明かりがあればいいんだ。こんなときのためにランタンを持ってきてるんだよな。乾電池式でちょっと重いけど、ラジオもついてて頼りがいのあるやつだ。
靴を履いたまま四つん這いでテントに戻り、バッグの横に置いていたランタンを手に取る。スイッチを入れればテントの中にまばゆい明かりがあふれる。
これなら何とかトイレまでは辿り着けそう。さすがにゆるんだ腹を抱えた状態で一寸先の闇を進めるわけがないからな。
「よし、行くぞ……んぁっ!?」
意気込んでテントの出入り口から一歩踏み出して、すっ転ぶ。足元の石に爪先を引っかけてバランスを崩し、石だらけの場所で尻餅をついてしまった。
「いっ、たぁ！」
瞬間、ランタンの暖色が幻だったみたいに消えて闇に飲み込まれる。転んだ拍子にランタンを手放してしまい、地面に叩きつけてしまった。
くっそぉ、明かりを手に入れて油断してしまった、っ。足元は舗装された道路じゃない岸辺だったのに。
ごぎゅるるるごぼごぼごぼっ！
腹痛いっ、うんこ、トイレぇ……！
ひりひりするお尻をかばいながら何とか体勢を立て直し、転がったランタンを拾う。落として消えちゃったけど、壊れちゃったかな。たまたまスイッチが地面にぶつかってオフになっただけだよな……？
顔に近づけて見た限りでは破損はないけど。
かち、かち
明かりがつかない。
うっそだろおい、壊れちった……。なんか軽くなってる気がするし、部品か何か取れてどっかいったのか？　大きい本体ならともかく、取れたらしき何かを見つけることは難しかった。
諦めきれず何度スイッチを押しても戻しても明かりは灯らず、空しく乾いた音が聞こえるだけ。
どうしようどうしようどうしよう！
早くうんこがしたいのに真っ暗なままじゃ辿り着けない！
おおお落ち着け。他に光源になるものは、そうだ、携帯電話。
……って私の携帯電話はスマートフォンじゃなくてカメラもついてないキッズ携帯。ライトなんかついてないし、液晶の光なんかないも同然だ。
うぅ、腹痛い暗い怖いうんこがしたい！
こんな真っ暗闇、歩けるわけないだろぉ……。
きゅるるるるる　ぐぷぷぷぷぷっ！

目覚めるきっかけになった尿意なんか、霞んでしまうほどに、腹が痛い！　うんこしたい、下痢うんこが出る！

「う……ん、ふっ」

ぶっすぅぅぅぅぅぅ！　ブーッ！

隆起した欲求を抑えきれなくて、おならをしてしまった。高熱のガスがぬめった肛門を駆け抜けていく。

「くっさぁ、うぇぇ」

情けない音が閑静な夜に響き渡り、すぐに悪臭がたちこめる。

ずっと腹がぐるぐるしてたから、おならがしたくてたまらない。他人が嗅いだら間違いなくどろどろうんこを我慢してるとバレる、ひどい臭いのガスが出したくてたまらない。

誰もいないし、しちゃえ……！

「ん、ふぅぅ、ん……っ。んふっ」

ブッ！　ブゥゥッ！　ブッ　ブスス　ブピブピブピ！

くっさ、めっちゃうんこの臭いだ。お腹の圧力が抜けていって、ちょっとだけ楽になる。

でもこの臭いに腹具合、ゆるいどころじゃない。下痢っぽい。

ぎゅる……

「うぅ、いたたたた、だ、だめだ」

ギュルルルルルゴボッ！　グリュリリリ〜ッ!!

腹を壊して、猛烈にうんこがしたい！

「と、トイレぇ！」

自宅なら布団を跳ね飛ばしてトイレに駆け込む。学校ならすぐに人気のない場所を探し、授業中でも挙手を検討するレベルの腹痛と便意が私を襲う。

うんこ、うんこ、うんこ。もううんこのことしか、考えられない。

がっかり微調整!?　激しいぽんぺが止まらない!!

まちカドまぞく　シャミ子

「おおお……おなかが痛い」

あんまりにもぽんぽんがぺいんすぎて、目が覚めてしまいました。

もう朝ですか。お腹がぱんぱんになるまで食べ過ぎてしまい、もとい胃袋いっぱいになるまで食べ物を詰め込まれ、胃もたれで寝付けなかったのですが……いつの間にか寝入っていたみたいです。一度寝付けばぐっすりでしたね。いえ夜中におしっこがしたくなって一回起きました。ちゃんと寝る前におしっこを済ませられるまぞくにならないといけません。

ごろごろごろ……

うぅ、食べたのは昨晩なのにまだおなかがヘンな感じです。

不可抗力にも桃色魔法少女の血を奪い取り、私の家にかかっていた一カ月四万円生活の呪いは解けました。

ひもじい食生活から解放され、吉田家に受け継がれる【儀式】――いいことがあったときは家族で鉄板を囲むことです！　をしたのですが、フィーバーをし過ぎた結果、がっかり微調整によって我が家の年代物冷蔵庫さんは故障してひんやりを出せなくなってしまいました！

買い置き食材を無駄にするわけにはいかず、当日に全て調理して、食いだめ（人類はそんなことできません！）をする羽目になったのですが……。半日経ってもおなかの気持ち悪さがなくなっていません。

角で重い頭と胃もたれのせいで重苦しい身体を引きずって居間に向かいます。

「おかーさん、おはようございます」

「おはよう優子。ちょうど朝ご飯ができましたよ」

「いやこれ昨晩料理して置いたままの野菜炒め！　ごまかそうとしてリアルタイム感を出さないでください！」

「食べきれなかったのでしょうがありません」

「まだぽんぽんがぱんぱんなので今日はいいです……」

やっともやしアンド特売の卵アンドもやし生活から脱出できたというのに、朝ご飯を食べることもできないなんて。毎食もりもり食べてけんこうまぞくになりたいのに！

ぐるるるる……

うっ、もりもりといえばとばかりにお腹が鳴ってしまいました。

「ほら優子お腹が空いているみたいですよ。さ、食べてください。食べてくれないと数日分の買い溜め分が無駄になってしまいます」

「後で食べますから……先にトイレを済ませてきます」

「あっトイレは今」

これはお腹が空いているのではなく、ぽんぺの音です。

うんちがしたくなってきました……。

私快便とは言いがたい体質なので、もう四日ぐらいうんちが出ていないお便秘さんなのですが、今日はなんだかすぐにうんちが出そうです。これも昨日三日分くらいの食料を食べさせられたせいですね。

もやしメインで食物繊維を大量摂取はするものの、一食が少ないせ

いでおなかの動きが弱く、うんちが硬く大きくなるまで便意を催さないくせに踏ん張る力も弱くて時間がかかるのがいつもなのですが。
これでスッキリできればお腹の空きができてご飯を食べられるかもしれません。
気持ちのいいうんちをして一日をスタートさせましょう！
と意気込んできたものの、トイレのドアノブが赤くなっていますね。誰か入っています。おかーさんは居間にいたということは、妹の良子がトイレ中のようです。
「ん……うんっ、ん、うん……んっ」
この息み声、どうやらバトルの真っ最中。良がうんちをしています。
私ほどじゃないですがお便秘さんな良も、ときどきトイレで大奮闘を繰り広げています。こうして朝にお便秘姉妹のスッキリできそうタイミングが被ってしまうと、時計を見ながらもじもじと待たされることになりますが、なんと今日は休日なので良も私もお互いを気にせずうんちに集中できます。血の繋がった姉妹なのでうんちは恥ずかしくないですが、時間がかかりすぎて待たせるのは気分がよくないです。
「ん、はぁ、はぁっ。う～んっ、んぅ」
かなりの大物とバトルしているみたいですが、なんだかいつもよりも苦しそうです。
こんこんっ
「良？　まだかかりそうですか？」
「あ、お姉……。うん、まだ出られそうにない、かも」
トイレは一つなので順番は早い者勝ちが吉田家のルールです。良が大物を倒し終わるまでおねーちゃんは待つとしましょう！
今すぐうんちが出そうな感じですが、別におなかの具合が悪いわけじゃないですから、じっくり待ちます。
「もしかしてお姉も、大きい方……？」
「はい、大きい方というよりは硬くてでっかい方です。四日分です」
「あのね、お姉、良も大きい方、してて、」
「大丈夫です、おねーちゃんは待てますので。良は気にせずうんちしててください」
「違うのっ、うんちはうんちなんだけど、実は、うっ！」
ブリブリブリブリビチビチビチ！
どろどろべちゃべちゃな音が聞こえます。これは硬いうんちが出てる音じゃありません！
「ん、くっ、ちょっとお腹の調子がよくなくって、時間がかかるかも」
「おなかを壊しているのですか!?」
「うん、そうみたい……。食べ過ぎてお腹が痛くて……おトイレしたくなって起きてからずっとうんち、止まらなくて。ううっ！」
ブビビビブチチチチ～ッ！　ブリュブリュブッ！
ブボッブピピピピ！
「うんちいっぱい出たのに、まだ出そう。だめ、おトイレ離れられない……！」
なんて痛ましい音でしょう……。良が下痢ピーのうんちをしています。さすがに二人して食べ過ぎましたから、良が消化不良でおなかを壊してしまっても仕方ありません。
まぁ私はおなかピーピーじゃないので、余裕です。おかーさんがうっかり冷蔵庫の奥で傷んだ食べ物で食事を提供してしまうと、同時

にお腹を下してトイレの取り合いになることも珍しくないです。
「お姉もお腹壊してるの……？」
「おなかはヘンですが痛くはないので、スッキリするまでトイレしていていいですよ。おなかピーピーなら仕方ありませんから」
「じゃあゆっくりしてるね……んっ、でる……！」
ブビチブビビビビビビビビビビビビ～ッ！　ブピピピプポッ！
ビチビチブチュブチュビチビチビビュッッ！　ブピブポブピピ！
ブジュブジュブジュジュジュ……プゥーッ!!　ブーッ!!
「お腹が痛い、うんち、う～ん……」
「良……」
ひどい下痢です……。腐っているのに味噌を塗りたくって西京焼き風にしてごまかしたお魚さんを食してしまったときは、二人ともこんな地獄の下痢ピーでした……。
「おねーちゃん居間に戻ってますね」
「うっ、う～ん、うぅ～ん……ふ、ぅぅ～んっ！」
具合が悪すぎて聞こえてないとは、よっぽどです。どれだけ時間がかかるかわかりませんし、離れてあげましょう。いくら姉妹でもびちびちのうんちの音は聞かれたくないものです。トイレを出るまで水を流さないのも吉田家のルールですから音消しできません。生活費の呪いは解けても節水は大切ですからね。
ピンチのときはものすごく高いハードルになる高い段差の上でしゃがみ、かわいいお尻を丸出しにして必死の形相で踏ん張っている良が想像できます。和式便器だからずっとしゃがんでいないといけなくて足がつらいんですよね……。

冷蔵庫を買い換えたついでにトイレも座れる洋式便器にチェンジできないでしょうか？　おかーさんにダメ元で訊いてみましょう。お便秘バトルのときも下痢ピーのときも座っていられる方が健康にいいに決まってます。
あとお尻を洗うやつも欲しいです。
居間ではおかーさんが黙々と朝食を摂っていました。
「良、ひどいピーピーでした……」
「もう一〇分以上トイレにこもっていますが、まだまだ出られなさそうですね。優子は大丈夫ですか？」
「私もちょっとしたい感じですが、硬くてでっかい方なのでおなかは痛くないです」
おなかの感じはヘンですが便意は普通なので、なんなら我慢できそうです。でも我慢はからだによくないので、良がスッキリしたらちゃんとトイレに行きましょう。
「もしかしたらこれもがっかり微調整の影響なのかもしれません」
「どういうことですかおかーさん！」
「一気に食費を使ったことでフライ返しが折れ、冷蔵庫が壊れたように、フィーバーが過ぎたせいで調整が入りましたね」
「はい」
「つまり優子も良子も豪華な食事を摂ってしまったばかりに、帳尻合わせでお腹を壊してしまったのかもしれません」
「な、なんだってー!?　……でも私はおなかを壊してませんが」
やっぱり単純に食べ過ぎのせいでは？
「そういうことなら、おかーさんはおなか痛くないんですか？」

「いえ全然。痛いといえば冷蔵庫の故障で大出費したので、財布が痛いですね……。既に調整のダメージを受けたと言っていいでしょうね」
その理屈なら私もおなかがぐるぐるぴーしてげりぴーまぞくになってしまうのでは？　トイレの住人になる前に少しでも出しておかないと！
ゴボジャァーッ！
お、トイレの水洗音が聞こえます。このアパートメントは壁が薄すぎるので小で流しても丸聞こえです。大の向きに流そうものなら玄関越しでも「うんちしました！」アピールが届いてしまうます。
それはそうと良のトイレが終わったみたいですね。ほどなくしておなかを擦りながら良がトイレから戻ってきました。顔色は芳しくなく、猫背でぐったりとしています。
「お姉、おまたせ……」
「良！　おなかの具合は大丈夫ですか？」
「うん……お腹痛いのは少しよくなったけど、げりだからうんち、またしたくなるかも……」
「おなかをあったかくしてお休みしましょう。さて私もトイレに行きますね」
「だいぶ下しちゃったからまだ臭いかも……ごめんね」
「気にしないでください！　おねーちゃんも負けず劣らずすごいのが出るかもしれませんので引き分けです（？）」
ゴッギュルルルルルルッ！
居間にギャグ漫画みたいなお腹の悲鳴が響き渡りました。良は青かった顔色をさらに真っ青に染め、お腹を抱えています。
「うぅぅ、お腹が痛い……！　いっぱい出たのに、またげりのうんち、したくなってきた……!!」
「良!?　おなかがまた下ってしまったんですね、早くトイレに行ってください！」
「でもそしたらお姉がおトイレ、できない、順番だから、がまんできるから、」
「おねーちゃんに遠慮は無用です！　硬でかうんちはいつでもできますから、ほら早く！」
「お姉……っ、だけど――あっうんちだめっ！　でそう……！　ごめんなさいっ、おといれっ！」
バタンガチャン！　ばさばさばさっブババブチューッ！
よたよたと踵を返してトイレに駆け込み、すぐさまひどい音が響いてきました……。良、かわいそうです。
あの様子だともう何十分かは出てこれそうにありませんね。お昼ぐらいになれば良のお腹も落ち着くでしょうか。私が入ってて良が催したら大変なので、しばらくは我慢しましょう。
「良子も朝ご飯は無理そうですね。おかゆを作ってあげないと……。ということで優子が代わりに野菜炒めを食べてください」
「二人分もですか!?　栄養と食物繊維過多で次におなかを壊すのは私になってしまいます！」
「前日に炒めたものなので常温で置いておくのは厳しいですね。捨てるわけにもいきませんしやはり優子に食いだめしてもらうしか」
「貧乏性を極めておなかを壊すのは不合理です……。食いだめしても即出てきてしまっては意味がないのでは？　……そうだ！」

私たち以外にも滋養強壮を求めている人がいるではないですか！

「桃のところに持っていって、朝ご飯にしてもらいましょう。向かっている間にお腹も空くと思うので、私も桃の家で食べてきます」

実は昨晩、作り置きを保存してもらうために桃の家の冷蔵庫を侵略したばっかりですが……。もやしをお見舞いして恩を売りましょう。

タッパーに野菜炒めを詰めて、お出かけです。

「ふぅっうんっ、ん……ぅぅ～んっ！」

ビチッ　ビチバジュビッ　びぢびじゅびぢびぢびぢ……！

トイレの横を通りかかると、水っぽい音が聞こえてきました。良はまだうんちが止まらないみたいですね。

「では行ってきます」

昨日はものすごい雷雨でしたが、今日は晴れていますね。

ごろごろごろごろ……

むっ、外に出た途端おなかがごろごろしてきました。やっぱりトイレに……でも良がぴーぴーで変わってもらうのは難しいです。幸いにも私は下痢ピーじゃないので、このまま桃の家に向かいましょう。

あわよくば桃の家の洋式トイレでスッキリするのも悪くありません。お尻を洗える便座つきなのでうらやましいお家です。

でも宿敵である魔法少女のテリトリーで大便をしてしまうのは大変恥ずかしいことでは？

『シャミ子は人のお家でどデカいうんこをする、恥知らずまぞくなんだね。とても臭いよ』

きさまもうんちをするだろうに！　想像の魔法少女にキレ散らかしても空しいばかりです。桃に腹具合を心配されたり、汚した後のトイレを掃除されるのは屈辱です！

まぞくはまぞくのトイレ（？）でうんちをしなければ。さっさと野菜炒めをデリバリーして、我が家に帰ってきましょう。

それにしても良の腹具合はかなり深刻そうでした。腐ったものを食べてしまったとき並のピーピーうんちでしたし、トイレを出てすぐ催してしまうのはよっぽどです。

昔は良よりも私の方がおなかを下す回数は多かったのですが、まぞくとして覚醒してからはほんのちょっぴりおなかの調子がよくなったと思います。具体的にはちょっとした体調不良でおなかがゆるんだり、すぐ下痢になることはなくなりました！

私は小さい頃からからだが弱くて下痢しがちでしたが、今ではお便秘です。まぞくになっても糞詰まりはよくなりませんが。もしや快便になれないのも呪いの影響なのでは？

快便まぞくになるためにもっと桃の血を……しかし不可抗力とはいえ魔力を奪ったばかり。そのせいで桃は具合が悪くなって今も寝込んでいます。昨日も顔色がよくありませんでしたし。

ぐるごろろ　ぎゅうーっ

「うっ、おなかが痛い」

お家ではなんともなかったのに、大腸が痛みを訴えてきました。それなりにうんちがしたい感があります。

どこかに寄ってトイレを借りた方が……いえ、いくら催したとはいえうんちはお家で済ませたいです。

ぐごろろろきゅぅぅぅぅ……

「ほえっ！　おなかが、おなかがぎりぎりします」
　大腸がうねうねしているとき特有の腹痛が、断続的に訪れます。普通のうんちではこうも痛くなりません。もしかして私、おなかがゆるいのでは？　がっかり微調整は関係ないとしても、かなり食べ過ぎましたから消化不良で胃腸がオーバーワークを起こしていても不思議じゃありません。
　うんち、したくなってきました……。
『シャミ子～、シャミ子や～』
　野菜炒め入りタッパーを収めたエコバッグの中から、凜々しくも気高い声が聞こえてきます。解けた呪いの一つとしてごせんぞはごせん像を介して声をお届けできるようになったのです。
「どうかしましたか、ごせんぞ！　あっそういえば今日のおそなえものを忘れていました！」
『それはよい……。タッパーと一緒に運ばれているおかげで冷めたもやしアンドもやしアンド豚肉をいただいている』
「何かありましたか。呪いが解けて食費が増えても胡椒をケチったりお肉の比率が低かったりするのはしょうがありませんので」
『そうではない。もしかしてシャミ子もお腹が痛いのでは？』
　それに気付くとは、やはりごせんぞ様……！
『さっきから痛い痛い呟いていれば気付くわ。実を言うと、ぽんぺを抑える画期的なアイデアがあるのじゃが』
「なんですと!?　それをもっと早く言ってください！　下痢ピーをして休み時間に挙手をしたり、帰宅中にトイレを探して旅に出たりする必要がなくなるとは!!　今すぐ帰って良にも教えてあげましょう」
『いやこの方法はまぞくであるシャミ子にしか使えん』
「そうですか……。しかし公衆トイレを第二の住まいにしかねない予感がビンビンきています。今すぐ実践しましょう！　で、その方法とは？」
『危機管理フォームに変身するのだ！』
「えー!?」
　土曜日の朝九時くらい天候は晴れ、街の皆々様が元気よく活動する絶好の時間帯ではないですか！　こんなお出かけ日和のお散歩お買い物タイムにお腹丸出しの露出まぞくになってしまうと……。
「色々な人に見られて回覧板デビューです！　ろしゅつまぞくにご注意くださいと回覧されることうけあいです！」
『だが危機管理フォームならちょっぴり足は速くなるし、体調が気持ち良くなるし、つまりお腹の具合もほんのり維持できる』
「私の魔力が残念なばかりに効果が微妙そうです。ごせんぞの提案はありがたいですがこのまま桃のお家に行きますから。最悪トイレを借りればいいのです」
『魔法少女の住処でウンコをするなど恥ずかしくないのか!?』
「ドヨクジに露出するよりはマシです！　ぽんぽん丸出しコスプレはニチアサしか許されませんー！　いえ明日ならいいというわけではないですけど」
　ごっごろごろごろ……ぐるぐるぐる～っ
「ほぇあっ!?　どんどんうんちがしたくなっていきます！　この感覚、間違いなくピーピーになります！」
『子孫がクソ漏らしは魔族の恥じゃ～！　早くトイレに行くか変身

するのだシャミ子よ！』
「もらしませんっ！　私は余裕を持ってトイレに行けるまぞくなんですからね!?」
　とはいえこのままではお便秘四日分プラス食いだめ三日分の合計一週間うんこを抱えて街を彷徨う下痢ピーまぞくです。この辺は住宅街で気軽に使えるトイレはありませんが、もう少し歩けば商店街です。コンビニや公園があるので、やばそうだと感じたらトイレを借りましょう。
　だが住宅街ゾーンを抜ける前に、やつが待ち構えています。あっ私を睨んでいます――ほえる犬!!
　桃に借りを作るきっかけの一つで、パソコンを持ち帰るときも大きな障害となったでかくてほえる犬っ！
「うぅ～」
　ほえられた拍子に力んでしまってうんちを出してしまうかもしれません。でもここを通らないと桃のお家に行けません。犬にほえられてうんちを漏らすなどあってはならないことです。まぞくの恥です。
『早く危機管理フォームに』
「いけません！　ごせんぞは一刻も早くおなかと社会に優しい衣装に変えてください！　リテイクの要望何度目ですか！」
　お願いします犬小屋に戻ってください二度寝をしてくださいこわい～犬こわい～！
「バウワウ！　ワウーゥ！」
「ぴぃーっ!?　わたしはわるいまぞくじゃありません！　食べないでください!!」

　ゴロゴロゴロギュルルル！　グルルルルギュリリリリッ！
　あーっ!?　おなかが痛いうんちがしたい本格的にゆるんできましたあとビビって息んでしまいました！　う、うんち、だめですこのまま私は犬にほえられて動けなくなって公共の道路でうんちを漏らした挙げ句、『シャドウミストレス優子ちゃん一五歳をお預かりしています　ご家族の方は替えの下着と洋服を持ってほえる犬のお家までお越しください』って町内放送されて晒し者になってしまうんだ～!!
「き、危機管理～ッ!!」
　炎天下で闇とか黒いのとかが渦巻き、お出かけお洋服が見る見る内に変貌していきます。本能的にピンチを感じて変身してしまいました！
　おなかが痛くない！　今のうちに――!!
「う、うおおおあ～っ!!」
　ちょっぴり速くなった足を生かしてほえる犬の前を全力ダッシュ！　あまりにも速すぎて犬も見失ったみたいですね！
「はぁ、はぁ……、ごせんぞ、やりました。ほえる犬に勝ちました」
『うむ、やはりこの装束でよかっただろう』
「それはないです。さて危機は脱しましたので変身を解除――」
　あれっ、戻りませんね。念じればなんとな～く戻ったはずなのに、ろしゅつまぞくから一般まぞくに着替えることができません!?
「ごせんぞ変身解除ができません」
『今危機管理フォームをやめたらぽんぺが再開して漏らしてしまう、とシャミ子の本能が訴えかけているのかもしれん』
　え～！　ではうんちを済ませるまでこの格好のままということで

すか!?　それはまずいです、まだ桃のお家の折り返しどころかスタート地点からちょっと越えたくらいなのに！

どこかでトイレを借りないと、でもコスプレ状態のまま人目のあるコンビニや公園、ましてや商店街になんか行けません！

ギュルギュビギュビギュルルルッ！

「それにおなか丸出しのせいで急に冷えてきました！　おなかが痛いですうんちがしたいです！　これでは変身してもしていなくても同じでは!?」

お家に戻ろうかな、でも良がうんちしてるかも、代われたとしても私もスッキリするまで何一〇分かかりそう……その間にまた良がピーピーになったら大変です。それに再度ほえる犬の前を通らないといけないのは難しすぎます。

この格好のままでもトイレに入れる場所、もう桃のお家しか……。まだ桃には危機管理フォームを披露していませんが、察してくれるはずです……。いや夢の中でお見せしてました。

「もたもたしていられません。早く桃のお家でうんちをしないと!!」

『当初の目的が変わっているぞシャミ子！』

遠慮しないで。

スローループ　小春×ひより

こん　こん
なんとなく、ノックをすることをためらってしまう私がいる。
「はぁーい。入ってまーす」
底抜けに明るい、無警戒の声。
「ひよりちゃん？　ちょっと待って、もう出るからー」
小春が――新しい家族が使用中だった。
トイレのドアをノックをするということは、ほぼトイレに用があるということだから。それがマナーだとしても、家族が相手でも欠いてはならないことでも、今は恥ずかしい。
「んっ……」
みち　にちにちにち……ぼちゃん
うんち、してる。私がいるのに、小春がうんちしてる。
「んん、うんっ。うーん、う～ん」
にちち　ぽちゃ　みちみちみち　ぶりゅ　ぶりぶりぶり……
廊下が静かすぎて、トイレの中の息遣いと排泄物が水に跳ねる音が、うんちが擦れる音さえも聞こえてしまう。
って何意識してるんだ、私！
耳を澄ましていることに気付き、頭を振って邪念を振り払う。
ぶりぶりぶりゆりゅ　ぷりゅっ　ぶちち　とぽん
「ん～、うんっ。……ふぅ。ウンチでたぁー」
がらがらがらがら　びりっ　ぐし　ぐにっ　がらがらがらっ
便座に腰掛けて、息んで、うんちを出して、出し終えて、トイレットペーパーを巻き取って、汚れを拭いて、また巻いて。
あまりにも無防備な姿が、脳裏に浮かぶ。
ごぼじゃぁーっ！　がちゃ
「お待たせー。スッキリしたぁー」
まだ水が流れ終わってないうちに、小春がトイレから出てきた。
「ひよりちゃん？」
「あっごめん、ぼーっとしてた」
「？　私ウンチ終わったから、次どうぞ」
「うん……」
ついさっきまで気持ちよさそうにうんちをしていた小春は、何のためらいもなく恥じらいもなくトイレを譲ってくれた。
――私はうんちをするのが、恥ずかしいのに。
ぐるる、っ
小春が手を洗っている間にさっとトイレに入る。中は当然、小春のうんちの臭いが残っていた。
別に、いやなわけじゃない。
うんちは誰だってするものだから。
お互い様だから。
私と小春は家族、なんだから。
小春のうるさい足音が遠ざかるのを待って、便器に腰掛ける。
「はぁ……」
今日も朝ご飯を食べて、うんちがしたくなった。だから、トイレに来た。学校に行く前に済ませようと思って、トイレに向かった。そし

たら先に小春が用を済ませていた、それだけなのに。
トイレで顔を合わせて、これからうんちをするんだと思われるのがどうしようもなく恥ずかしい。
やっぱり小春が部屋に戻るまでどこかでやり過ごせばよかった。寝起きにおしっこを済ませた後に、入れ替わりで小春もおしっこしたんだから、短時間に二度もトイレを訪れたら大きい方だと思われるに決まってる。
私と小春は家族だ。
この春にうちの母親と小春の父親がお互いに再婚して、小春たちの方が引っ越してくる形で一緒に過ごすことになった。
天真爛漫に明るくて、元気いっぱいで、思ったことがすぐ口に出てしまう女の子。
私とお母さんと、もういないお父さんの家は。二人だけだった家は四人で過ごす賑やかな家になった。
最初は困惑したけれど、今は打ち解けたように思う。私が気まずいと思っていたように、小春も過ごしたことのない街に来て、少しは気まずいと感じていたことを知って……。ちゃんと家族になれたとは思う、けれど。
恥ずかしいものは、恥ずかしい。
「早く済ませなきゃ。ん……」
小春は快便だった。引っ越してきた翌朝から、朝食後にかかさずうんちをしている。私も毎朝うんちが出るから、出てしまうからそれを知ってしまった。
『あ、もしかして待ってた？　あの、後にしてくれた方が、いいかも』
『ひよりちゃんもウンチ？　私もウンチだから気にしないで！』
初めて同じ屋根の下で過ごした、次の朝のことだった。いつものように朝のうんちを済ませてしまった私は、まだ親しみのない家族が同じ生活空間で過ごしているという感覚が希薄で、いつも通りにうんちを済ませてしまった。
小春がトイレが空くのをじっと待っていたとは知らずに息んで、うんちの音を立ててしまっていたことに気付き真っ赤になってしまった。一方で小春は堂々とうんちをすることを宣言していた。
『あっ、ちょっと、えっと。大きい方してたから臭いかも』
『私のウンチも臭いから大丈夫！　じゃあ、入るね』
小春の遠慮しない、明るい性格はうらやましく思う。と同時に心に浮かんだ感情をすぐ言葉にしてしまうところは直した方がいいと、懸念もしている。
小春のお父さん、つまり血の繋がっていない異性の大人と生活するのも、気まずさはある。それでも小春のお父さんが私のうんちの後にトイレに入っても、ちょっと気になるだけで、そこまで恥ずかしくはない。
それなのに同性で同い年の小春がすぐ後に入るのは、恥ずかしい。
「んん、んっ」
便意を催してすぐトイレに入らないことが増えてきて、最近はうんちがスムーズに出ない気がする。便意を我慢するから、感覚が鈍ってきたのかもしれない。
早くうんち出て……。
ぐぐ、ぐぐぐ

ん、来た。もう少しで、出そう……。もう歯磨きも身支度も済んだから、うんちを出すだけ、はやく、っ。

コンコンッ

「えっ!?」

「ひよりちゃーん?」

うそっ小春!? 突然のノックに慌てて息むのを止める。

「私は準備終わったよ〜。まだかかりそう?」

「ううんっもう出るから!」

「じゃあ待ってるね」

うちのトイレは玄関のすぐ横だから、待たれると聞こえてしまう。

うんちの落ちる音が、ついつい漏れた息む声が、ごかまそうとして流した水の音が。

恥ずかしくてうんちができない……。もういいや。

がらがらがら、びっ ぐにぃっ

念のためお尻を拭いて、水を流しながら立ち上がる。

うんち、できなかった……。

「あ、終わった?」

「……」

いそいそ手を洗う間もあどけなく微笑んで私を見つめている。直視するのが恥ずかしくて、無視して靴を履く。

「どうしたの? 顔色よくないね。具合悪い?」

「別に、っ」

「もしかして、お腹の調子悪かった? 急かしたつもりなかったんだけど、まだ出そう? あ、時間あるしまだウンチしててもー」

「あのっ!」

自分が思ったよりも大きい声が、小春の心配を切り裂いた。

「小春はさ、恥ずかしく、ないの……?」

「えっと、何が?」

小春が萎縮している。陽気で悩みの一つすらなさそうな元気印の少女が、私の顔色を窺っている。

しまった、やめよう。空気が悪くなる。わかっているのに。

「あ! ゆるいウンチすること? 確かに学校とかでお腹ゆるんだら恥ずかしいかな?」

「そうじゃなくて、そうだけど! おお、大きい方、すること!」

「朝ご飯食べたらしたくなるし、毎日出るから……それにほら、我慢すると身体によくないし!」

「そうだけど、さ」

小春みたいに言いたいことを何でも言えたら、楽なんだろうな。私はそれができない、勇気もないから。

「女の子なのに直接的な単語を言うのもだし、あんまり他の子とかにう、うんち出た、っ、とか出そう? とか聞くの……やめた方がいいよ」

「あ……ごめん、なさい。ひよりちゃんはイヤ、だった?」

「別に……。私こそ大声出してごめんっ。もうおしまい。学校行こう」

「本当にごめんね? ひよりちゃん、その、」

「もういいからっ。いってきまーす!」

感情のまま捲し立てて/本心を曝け出したことも、恥ずかしいのに。

うんちを恥ずかしいと思っていることを知られたのも……。はぁ。

ぐぎゅるるる……

う、うんちしたくなってきた。

小春に嫌な思いをさせた手前、家のトイレになんか行けないし。今日も始業前にこっそり学校のトイレで、しよっと……。

それから学校に着くまで息苦しい沈黙と、気を遣った小春の雑談に返事だけをして登校した。

教室に着いてから小春の様子を窺い、こっそりトイレへ。誰もいないのでいつもの奥の洋式トイレに入る。小春の前でうんちをするくらいなら、学校でする方がまだ恥ずかしくはない。

それに、もう慣れた。

「ん、ふっ。ん……」

ぷりりり　みちち　にちにちにち……ちゃぷん　とぷん

ぷりぷり　ぽっちゃん

ふぅ、やっとうんちができた。

数一〇分ぶりにお腹をすっきりさせてトイレを出ると、廊下で親友の恋ちゃんと鉢合わせる。

「ひよりおはよ」

「あ、恋ちゃんおはよう」

「もしかして、大きい方してた？」

「あー、うん」

「奥の洋式まだ臭いかもだから、別のところに入ってね」

「ううんトイレじゃないから、気にしないでー」

恋ちゃんとは幼なじみだし、小さい頃は一緒に泊まりがけでキャンプや釣りに行ったこともある。だから私が毎朝快便であることは知られているし、大親友だからお腹のことを聞かれても気にならない。

「最近学校で、してるよね。具合でも悪い？」

「そうじゃないけど、ちょっと家で、出なくって」

「あ〜。小春がいると、気になる？」

簡単に見透かされて、黙って首肯する。

小春とも恋ちゃんと同じ距離感になれれば、いいのに。

小春が、近すぎる。私が遠ざかるべき？　それとも合わせるべき？

これからはちゃんと小春がいてもうんちできないと、余計つらくなっちゃうな。明日から、がんばろう。

「ひよりちゃん、いっしょに帰ろ！」

「うん」

放課後には小春がいつも通り元気に話しかけてきたから、これでお互い消化して終わったんだと思った。

＊　＊　＊

「うん、うぅん、ん……」

みちちちち　ぽちゃ

にち、ぶりりりり

翌朝、土曜日。

壁掛けの時計は朝九時を指していた。

「うぅうんっ。う〜んっ」

うんち、まだ出る……。

にちゅにちゅにちゅ　ぶりぶりぶり
みちち　にち　ぶりぶりぶりりりっ！
「ふぅ……」
うんち、いっぱい出たっ。
朝ご飯を摂って約二〇分後、ちょうど食器を洗い終えた頃に便意を催した私は真っ直ぐトイレに来て、うんちをすることができた。
土日は登校時間が迫っているとか、家にいられるリミットがないので比較的うんちはしやすいけど、今日は小春の様子を見てトイレの時間をずらすなんてことはしないでうんちを済ませた。
はぁぁ、すっきりっ。もしかして今週初めて、家でうんちしたかも。月曜から金曜まで我慢したりトイレ入っても出せずに終わったりで、学校でうんちしてたから……。
やっぱり家のトイレでうんちするのが、一番気持ちいい。
後始末をしてトイレを出る。小春が待ってるかも、と覚悟していたが姿が見えない。手を洗ってダイニングに戻るとテレビを見ていた。
小春、まだ朝のうんちしてないはずだよね。普段ならもうトイレしてる頃だと思うけど、まさか昨日言ったことを気にして、ダイニングで待ってたのかな。
それもそれで気まずい。
「こ、小春、っ」
「えっ！　あ、うん、何っ？」
トイレ、空いたよ。
……って言うだけなのに、うぅ、恥ずかしい……。うんち終わったって宣言するようなものだし、やだなぁ。

「今日は何しよっか！」
ああ、ごまかしてしまったっ。
「雨降ってるし、釣りにいけないね」
残念そうな小春に、私も肩を落として共感するしかない。
「本読んだり、テスト勉強しよっかな。ひよりちゃんは？」
「今日は釣り道具のメンテでもするよ」
「そっか」
なんとなく小春の隣に座って、テレビを見る。
小春、トイレ行かないのかな……。
「きょ、今日の朝ご飯どうだった？」
「おいしかったよ。朝から漬けのどんぶりも悪くないね」
お母さんも小春のパパも仕事で不在なので、今日は二人きり。だから一緒に作った朝ご飯は――冷蔵しておいたお刺身をたっぷり使った、海鮮丼。釣っては持ち帰って、食べきれず保存するばっかりだったので、ちょうどおいしくアレンジして食べ切れてよかった。少し古い刺身だったけど味は悪くなかったし、大丈夫だよね。
ついでにお昼の分も刺身を味付けしたし、楽しみだ。二食続けて海鮮丼は飽きるかな？
見ていた情報番組が終わったのをきっかけに部屋に戻ろうとすると、小春も立ち上がってダイニングを後にした。あ、トイレかな。
だけど小春も自分の後ろについてきて、部屋に入っていってしまった。今日はうんち、したくなってないのかな。別に体調は悪くなさそうだったけど……そんな日もあるよね。
私が大きい方のことを気にされるのを嫌がってたのに、小春のお腹

の具合を気にしちゃうなんて。忘れよう。

一二時になり、昼食の準備をする。

朝に準備しておいたお刺身があるので冷蔵庫から出してみたけど、少し変色していることに気付いた。

「傷んでるかも。一度解凍してだめになったかな」

「そっかぁ。だめにしちゃってごめんね」

食べるわけにはいかないので廃棄。朝食べたのは解凍直後だし、大丈夫だよね。お母さんと二人じゃ食べきれなくて古い魚を消費するのは釣った私担当だったんだけど、そのせいでお腹を壊すことが多いから気になってしまう。

でもお腹は痛くなってないし、小春も下してないみたいだし。そういえば、小春は今日のうんち、済ませたのかな。

「じゃあ私が作るね！」

元気そうだし、問題ないよね。

冷蔵庫の余り物でパスタを作り、一緒に食べた。

「ごちそうさま、っ」

「小春、もういいの？　まだおかわりあるよ」

「もうお腹いっぱい、みたい」

少し明るさに欠けた笑みを見せる小春。食いしん坊さんが、どうしたんだろう？

刺身に続いて捨てるのも悪いし、じゃあ私が食べきろう。

「お皿は私がまとめて洗うから、水に漬けておいて」

「うん、お願い。部屋に戻ってるね」

うーん、やっぱり調子が悪そうだ。女の子の日なのかな。幸いにも土曜日だし、そっとしてあげよう。

小春に遅れてごちそうさまをして、食器を片付けてトイレへ。

ちぃ～じょぼじょぼじょぼじょぼ……

おしっこいっぱい出た……。今日は蒸し暑くていっぱい水を飲んだからかな。

ばたばたばたばた……

おしっこを出し終えて一息ついていると、足音が近づいてくる。小春がトイレに来たみたいだ。

こん　こん

「あ、入ってるよ。今出るね」

おしっこを拭いて水を流し、水流が止まってからドアを開ける。

「おまたせ」

「あ、うん」

入れ替わりに小春がトイレに入っていく。おしっこの後は別に恥ずかしくないなぁ。

「はぁ、ぁぁ」

じょぼじゃばばばばばじゅぃ～じゅぼじゅぼぼぼぼ……

そうだ、雨で家から出られないんだし、フライの巻き方でも教えてあげようかな。退屈な日でもいつの間にか時間が過ぎ去るくらい集中できるし。小春がトイレから出てきたら誘ってみよう。

「ふ、ふぅぅ」

ちょぼぼぼじょろろろろ……　しょろろ　ちょろっ

おしっこは終わったみたいだけど、紙を手に取らない。もしかして、

大きい方かな。
「ひよりちゃん、そこにいる？」
トイレの中から小春が窺い気味に声をかけてきた。
「うん、いるよ。話したいことがあって待ってるけど、いいよ、ゆっくりしてて」
「ううんっもう済んだから！　出るね」
ほどなくして小春はトイレから出てきた。なんだ、うんちじゃなかったんだ。小春は恥ずかしがらないから済むまで待つつもりだったけど。
「雨で暇だしさ、いっしょにフライを巻いてみない？　集中力がいるからすぐに時間が経って、面白いよ」
「ごめんねひよりちゃん、また今度がいいかな……。ちょっと気分がよくなくって。横になっててい？」
「そっか。じゃあメンテの続きでもしていようかな」
小春って女の子の日が重いのかな。それなら食欲がないのもしょうがないか。

＊　＊　＊

いつの間にか私は、ベッドに横たわってお腹を抱えていた。
机の上には分解したままのロッドが転がっている。
ちょっと寝ちゃってた。時間は午後五時、まだ明るい。
そうだ私、急に気分が悪くなって横になったんだっけ。寝ちゃうとは思わなかった。

ぐる　ぐるるる　ぎゅる
「お腹、痛い……」
うぅ、なんだか腹痛がひどいな……。ん、んん？
「っっっぅっ!!」
グギュルルルルルゴロゴロゴロギュリリリリ!!
突然私のお腹から激痛が走り、捻れた痛みで完全に目を覚ます。
う、うんち！　急にうんちがしたくなってきた!?
うんち、うんち、うんち！　うんちがしたくてたまらない！
お尻のすぐ裏側が膨張して、高熱の液体が流れ込んで来るのを感じる。下痢っぽい、お腹を壊してる！
下痢のうんちが溜まって肛門を押し開けようとしているのを必死で堪える。
「うぅぅ、いたたたた……くっ、うぅ！」
ギュルルルルゴボゴボゴボギリギリギリッ！　グゥーッ!!
だめだ、うんち、我慢できない……完全に下痢だ……！
お腹を壊して便意で頭がいっぱいになる。腹を擦っても治まらない激痛は、今すぐトイレに行けと身体が叫んでいるようだ。
ひどい腹痛、下痢の症状、朝ご飯、昼に捨てたもの、食後八時間ぐらい、か……。何度も魚に中った経験のある私は即座に原因に思い当たる。
朝に食べたお刺身、やっぱり傷んでたんだ……!!
状態を確かめもせず醤油や薬味、ごま油に漬けたから味じゃわからなくて食中りしてしまった！
「だめだ、はやく、トイレ……！」

もううんちのことしか考えられなくなりベッドを飛び降りる中、隣の部屋――小春のことを思い出す。

同じものを食べてるんだから、小春も中ってるかもしれない。今すぐトイレに駆け込みたいが、確認することがある。

「小春、いる？　お腹、痛くない!?」

「ひより、ちゃん……？　うぅっ」

明らかに苦しそうな呻き声、やっぱり小春も中ってるんだ！　薄いスライド壁一枚を隔てた先で、小春が腹痛に苦しんでいる。

「ごめん私のせいで！　朝の刺身、傷んでた！」

「ううん、味付けしたの、私、だもん。気付かなかった……」

どうしよう、自分一人だけならともかく、小春に迷惑をかけてしまうなんて――。

「く、ふぅぅぅっ！」

だめだ、本当にお腹が痛い！　うんち、出ちゃう……！

一秒でも早くトイレに飛び込みたい。便器に腰掛けて、うんちがしたい！　でもこれを確認しないと、安心してトイレには行けない。

「小春、お腹が痛いなら早く、トイレに……！」

何一〇分も、ひどければ一時間近くトイレの往復を余儀なくされる食中り。この家の大便器はたった一つ。同じタイミングで傷んだ刺身を食べて、お腹を壊してしまったなら、絶対に便器が足りない。

何も気付かずに小春に刺身を調理させた私が、小春より先にうんちをして楽になるわけには、いかないから……っ！

責任を取ってトイレの順番を譲る。それは私が便器で苦しみを解き放てないことを意味する。中り慣れた私ですらお尻が便器から離せなくなる激痛と壮絶な下痢を催してしまうのに、小春がすぐに用を済ませて代わってくれる保証はない。

外は大雨だし、近くに借りられるようなトイレもない。私はいっそお風呂場ででもいいから、小春だけは！

「ひよりちゃんもお腹、壊しちゃったんだ……いいよ、早くおトイレ行ってきて」

「で、でも、くぅっ、ふーっ！　私のせいなのに」

「えっと、私、先にウ、ウン……大きい方済ませたから、だいじょうぶ。まだ、がまん、できるよ。だから、してきて？」

「ごめんっ!!」

その言葉を聞いた瞬間、私は部屋を飛び出した。

もう本当にうんちが我慢できなくて、限界だった。

うんち、うんち、だめ、うんちがもれちゃう！

うんこタイムきらら Novels
サンプル版

[　小説　]もちづきうずめ @scuzume_at
[イラスト]
表　紙　あしぶ　@kohsokuasibumi
口絵１　みなみず　@PictsSouthern
口絵２　紫桃ふぃず　@PeridotFizz

サークル『ＣＲもちづきうずめ』
２０２１年　７月　２１日　電子版第１刷発行

初出イベント　ＢＯＯＴＨ通販

★頒布価格／時価

発行者：もちづきうずめ
印刷所：
連絡先：mochiuzu@gmail.com

本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、
発行者に認められた場合を除き、著作権の侵害になります。
また、業者など、読者本人以外による本書のデジタル化は、
いかなる場合でも一切認めません。
無断でインターネットなどへのアップロードを発見した場合、
ＤＬ数×頒布価格請求しますことを申し添えておきます。
@UZUME MOCHIDUKI 2021 Printed in Japan

発行サークル
ＣＲもちづきうずめ